小學國語讀本

尋常科用

卷十一

文部省

小學國語讀本

尋常科用

卷十一

文部省

目録

第一　吉野山……一
第二　見渡せば……五
第三　京都……七
第四　源氏物語……十三
第五　法隆寺……二十五
第六　五月の太陽……三十五
第七　姉……三十八
第八　電話の發明……四十二
第九　瀬戸内海……五十一
第十　日本海海戰……五十四
第十一　皇國の姿……六十一
第十二　古事記の話……六十三
第十三　松阪の一夜……六十八
第十四　北海道……七十四
第十五　我は海の子……八十九
第十六　間宮林藏……九十二
第十七　樺太の旅……九十九
第十八　雲のさまざま……百八
第十九　燕岳に登る……百十五
第二十　蟲の聲……百三十
第二十一　十和田紀行……百三十一
第二十二　歐洲航路……百三十七
第二十三　月光の曲……百五十四
第二十四　月の世界……百六十三
第二十五　秋……百七十二
第二十六　鐵眼の一切經……百七十三
第二十七　空中戰……百七十八
第二十八　日本刀……百八十七

尋國十一

八田知紀

安原貞室、

吉

櫻

詣

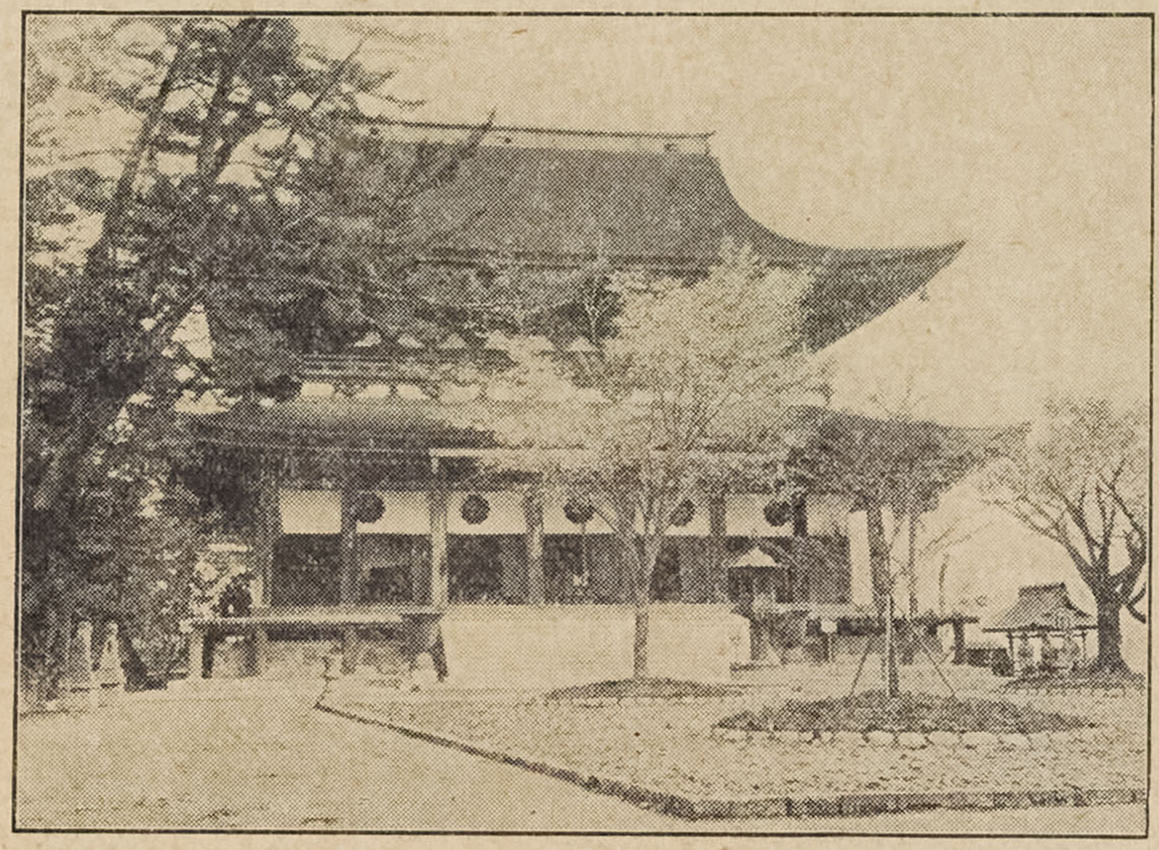
第一　吉野山

吉野山かすみの奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

全山花の雲に包まれたる吉野山の光景、まのあたり見るが如し。

吉野神宮驛に下車して、櫻樹（アウジュ）多き坂道を登る。先づ後醍醐（ごだいご）天皇をまつれる吉野神宮に詣（マウ）で、村上義光（よしてる）の墓をとぶらふ。更に進めば、眺望（テウバウ）いよ〳〵開けて見渡す限りすべて花なり。

これはこれはとばかり花の吉野山



といひし古人の句、我をあざむかず。こゝを下の千本（シモ）といふ。

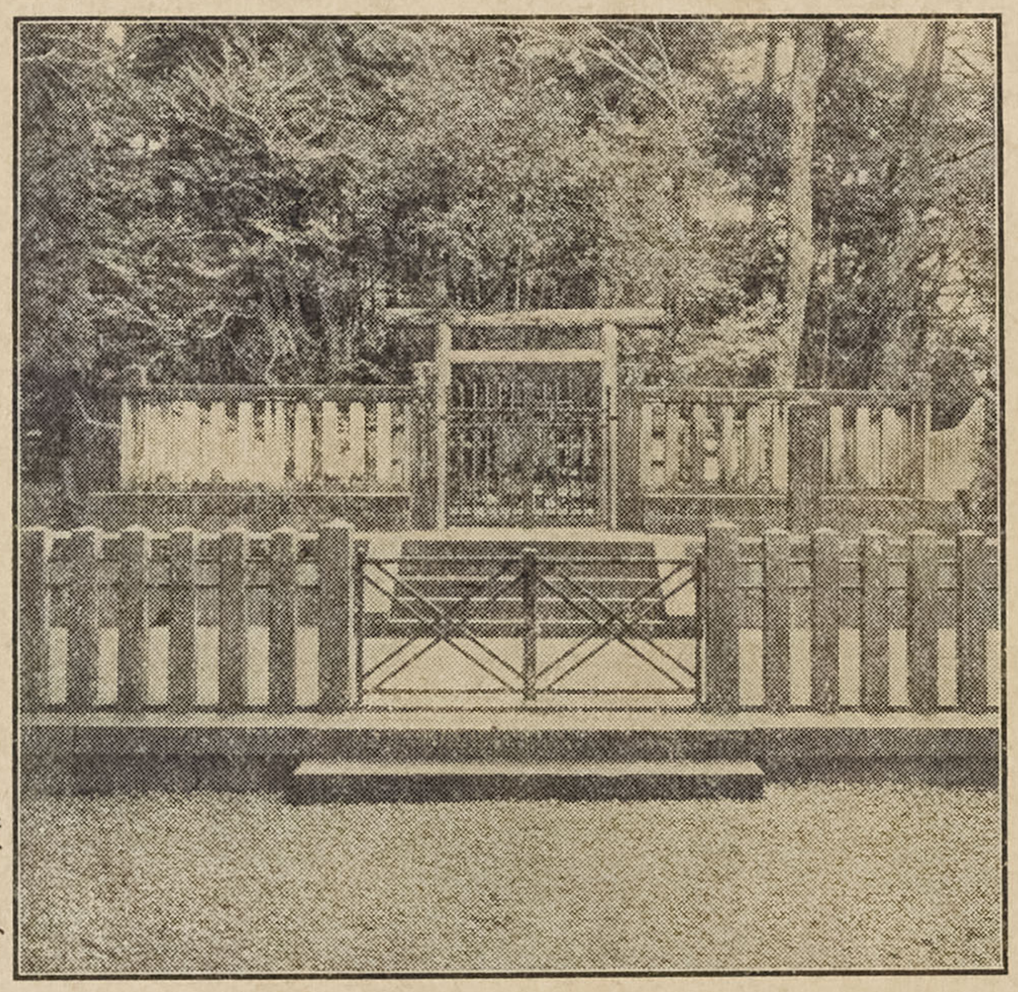
吉野の町に入れば蔵王堂あり。堂前四本の櫻ある所は、大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張らせ給ひし跡なりとぞ。藏王堂の附近に、金輪王寺跡及び吉水（ミヅ）神社あり。何れも吉野時代の行宮のありし所。後醍醐天皇の御製に、

こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞ宿と思ふにかりそめの

尋國十一

花に寝てよしや吉野のよし水のまくらのもとに
石走る音

吉水神社を出づれば、谷をへだてたる山腹に如意輪寺あり。正平の昔、楠木正行が、決死の士百四十三名の名を壁に書連ねし「かへらじとかねて思へば」の和歌を書残したるは此の寺なり。



寺の上の小高き所に、後醍醐天皇のみさゝぎあり。天皇行方の天を望みて崩御ありし御心事を察し奉れば、涙

尋國十一

禁

そぶろに禁じ難し。

満よし野山みさゝぎ近くなりぬらん散りくる花も

本昭憲皇太后御參拜の折の御歌、

あうちしめりたる

此の附近、櫻は山にも谷にも

ち〳〵たり。これを中の千本といひ、なほ登れば上の千本

り。

神本道を南に進みて忠僧宗信

れの墓をたづね、更に坂道をたど

ば、吉野水分神社を經て金峯

社に至る。　此の附近にもま

西行、

麓　錦

た櫻多し。　これを奥の千本といふ。

下・中・上・奥の千本の外、吉野山は至る所櫻樹ならざるなし。　花は麓より咲きそめて次第に山上に及ぶ。其の間(カン)ほとんど一月にわたるといふ。

吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん

第二　見渡せば

素(そ)性(せい)法(ホフ)師(シ)

見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける

やどりして春のやまべに寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

紀貫之（きのつらゆき）

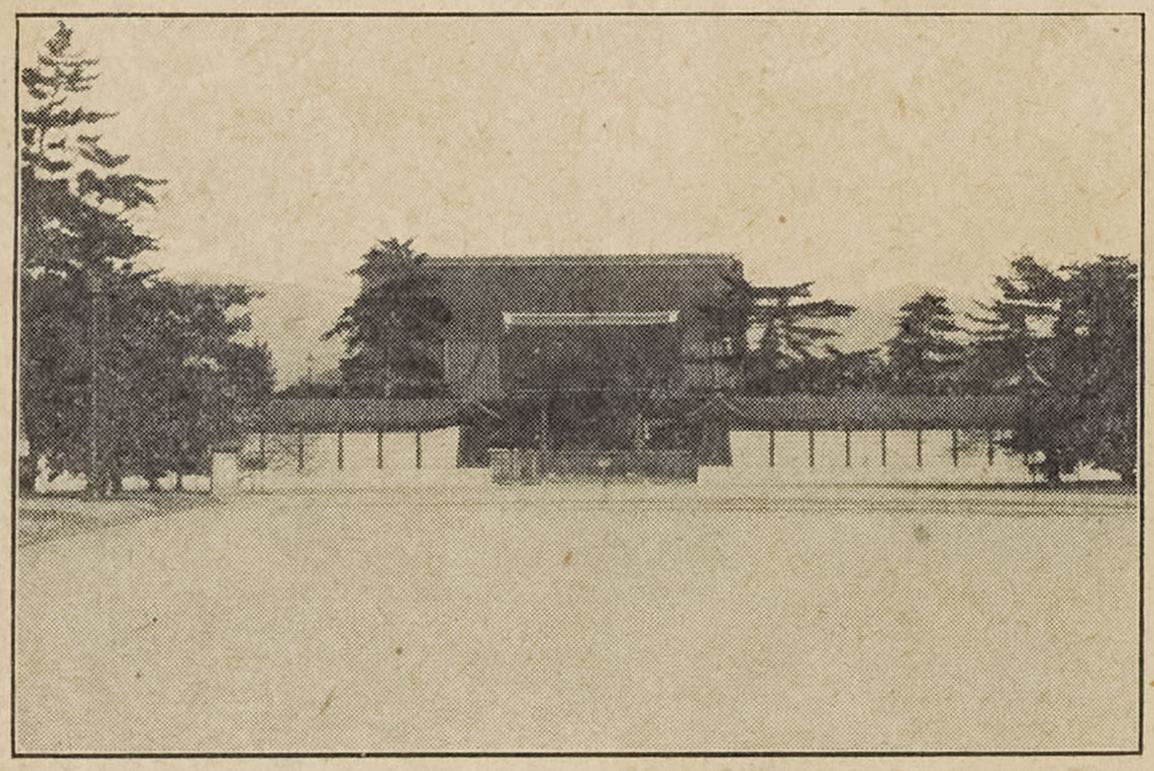
わが宿の池のふぢ波咲きにけり山ほとゝぎすいつか来なかん

よみ人

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行（ふぢはらのとしゆき）

白雲にはね打ちかはし飛ぶかりの數さへ見ゆるよみ人しらず



秋の夜の月

第三　京都

京都驛に下車して、行く〳〵見上げる大寺院は東本願寺であり、其のやゝ西に、同じやうな大伽藍を見るのは西本願寺である。

近代京都が誇る烏丸の大通を北へ進んで、京都御所の御苑に入ると、松青く芝生遠く續く彼方、正面建禮門をへだてて、檜皮葺の紫宸殿が尊

社　　護鎭

く拜せられる。　仰げばはるか北東の空に、くつきりと比叡(ひえい)山が聳えて、皇城鎭護の姿を昔ながらに見せてゐる。

賀茂(かも)川の清流に沿うて下賀茂の社に詣で、更に上賀茂の宮居に詣でる。　緑深き木立の間から、朱(あけ)の色あざやかな大鳥居・樓門(ろうもん)・廻廊(くわいらう)を望む時、神域(しんゐき)のけだかさをしみじみと感ずる。

靜けさ其のものやうな銀閣寺から、東山に沿うて南へ神社佛

興展　飾華

閣が多い。　先づ平安神宮を拜して大極殿の面影をしのび、南禪寺の山門を尋ねて途に疏水を見るのも感興が深い。　知恩院・圓山公園・八坂神社等、名所々々寺ゆかしく、清水の塔、八坂の塔、三重五重に聳えて、こゝ東山の中腹を飾つてある。

豐國神社に華やかなる唐門を仰ぎ、三十三間堂に一千一體の御佛を拜み、更に南して稻荷神社に詣でれば、伏見桃

恭鎭　層澤

山の御陵（ごりよう）はさして遠くない。

二百三十二段の石階を上る心もつゝましく、さて拜所に立つて恭しくぬかづけば、明治天皇は、かしこくも二重の玉垣の奥に鎭まりいますのである。東陵を拜して昭憲皇太后（せうけんくわうたいこう）をしのび奉り、麓の乃木神社に詣でてつく〴〵と忠臣の心を思ふ。

再びかへして二條の離宮から北西へ向かへば、北野神社はさすがに參拜の人が絶えない。名もやさしい衣笠（きぬがさ）山の麓に來て、三層の金閣を池水のほとりに見る美しさ。春ならば仁和（にんな）寺の櫻、秋ならば廣澤・大澤の池をたづねて、嵯峨（さが）野の昔をしのぶのもおも

峯

むきが深い。嵐山（あらしやま）の勝景は花によく、青葉によく、紅葉によく、高尾は滿山秋の錦を以て知られてゐる。

やさしいのは古都の眺である。東山三十六峯げに笑ふが如く、堂塔こゝかしこに聳えて、晝夜勤行（ごんぎやう）の鐘（かね）がさやかに聞かれる。三條の大橋が朝もやに包まれ、其の擬寶珠（ぎぼうしゆ）の一つ〳〵薄れて行く彼方には、川沿ひの柳が夢のやうに煙つて見える。たま〳〵見かける大原女（おはらめ）も、大路小路を行

く人の言葉も、川原々にさらす友禅染も、花と織出される西陣織も、すべて優にやさしいのが京都である。

しかし、京都はたゞ古い歴史だけの都ではない。町並が碁盤の目盛のやうだといつたのは、何といつても近代的大都市である。

四條・七條の橋はコンクリート造に代り、新しい大建築が市中至る所に聳

えるやうになつた。九條以南には工場の煙突が並び、東寺の塔に、ともすると黒煙がたなびかうとする。四條通・京極・河原町などに繁華が集つて、夜は電飾の輝きも華やかである。古都が、かうして年々に近代化して行くのもまた自然の勢であらう。

第四　源氏物語

紫式部（むらさきしきぶ）は、子供の時から非常にりこうでした。兄が史記を讀んでゐるのを、そばでじつと聞いてゐて、兄より先に覺えてしまふ程でした。父の爲（ため）時（とき）は、

才

「あゝ、此の子が男であつたら、りつぱな學者になるであらうに。」

と言つて歎息しました。

大きくなつて、藤原宣孝（ふぢはらののぶたか）の妻となりましたが、不幸にも早く夫に死別れました。其の頃から紫式部は、筆をとつて有名な源氏物語を書始めました。

其の後上東門院に仕へて、紫式部の名は一世に高くなりました。彼女は文學の天才であつたばかりか、婦人としても、まことに圓滿な、深みのある人でした。

父爲時が願つたやうに、若し紫式部が男であつた

ら、源氏物語のやうな假名文は書かなかつたでせう。當時、假名文は女の書くもので、男は漢文を書くのが普通であつたからです。しかし、假名文であればこそ、當時の國語を自由自在に使つて、其の時代の生活を細かく寫し出すことが出來たのです。かう考へると、紫式部は、やつぱり女でなくてはならなかつたのです。

源氏物語五十四帖は、我が國第一の小説であるばかりでなく、今日では外國語に譯され、世界的の文學としてみとめられるやうになりました。

次にかゝげる文章は、源氏物語の一節を簡單にし

て、それを今日の國語で表したものでですが、たゞこれだけで見ても、約九百年の昔に書かれた源氏物語が、如何によく人間を生きくと、美しく、細かく寫し出してゐるかがわかるでせう。

（一）

のどかな春の日は、暮れさうでなかくく暮れない。きれいに作つたしばに、折から夕日がさして、西側はみすが上げられ、年とつた上品な尼さんが佛壇に花を供へて、靜かにお經を讀んでゐる。顏はふつくらとしてゐるが、目もとはさもだるさうで、病氣らしく見える。そばに、二人の女がすわつて

ゐる。

時々女の子たちが出たりはいつたりして遊んでゐる中に、十ばかりであらうか、白い着物の上に山吹色の着物を重ねてかけ出して来た女の子は、何といふかはいらしい子であらう。切揃へた髪が、どもすると扇のやうに廣がつて、肩の邊にゆら〳〵掛るのが目立つて美しく見える。どうしたのか、其の子が尼さんのそばに来て、立つたまゝしく〳〵泣出した。

「どうしました。子供たちと言合ひでもしたのですか。」

と言ひながら、見上げた尼さんの顔は、此の子とどこ

か似た所がある。

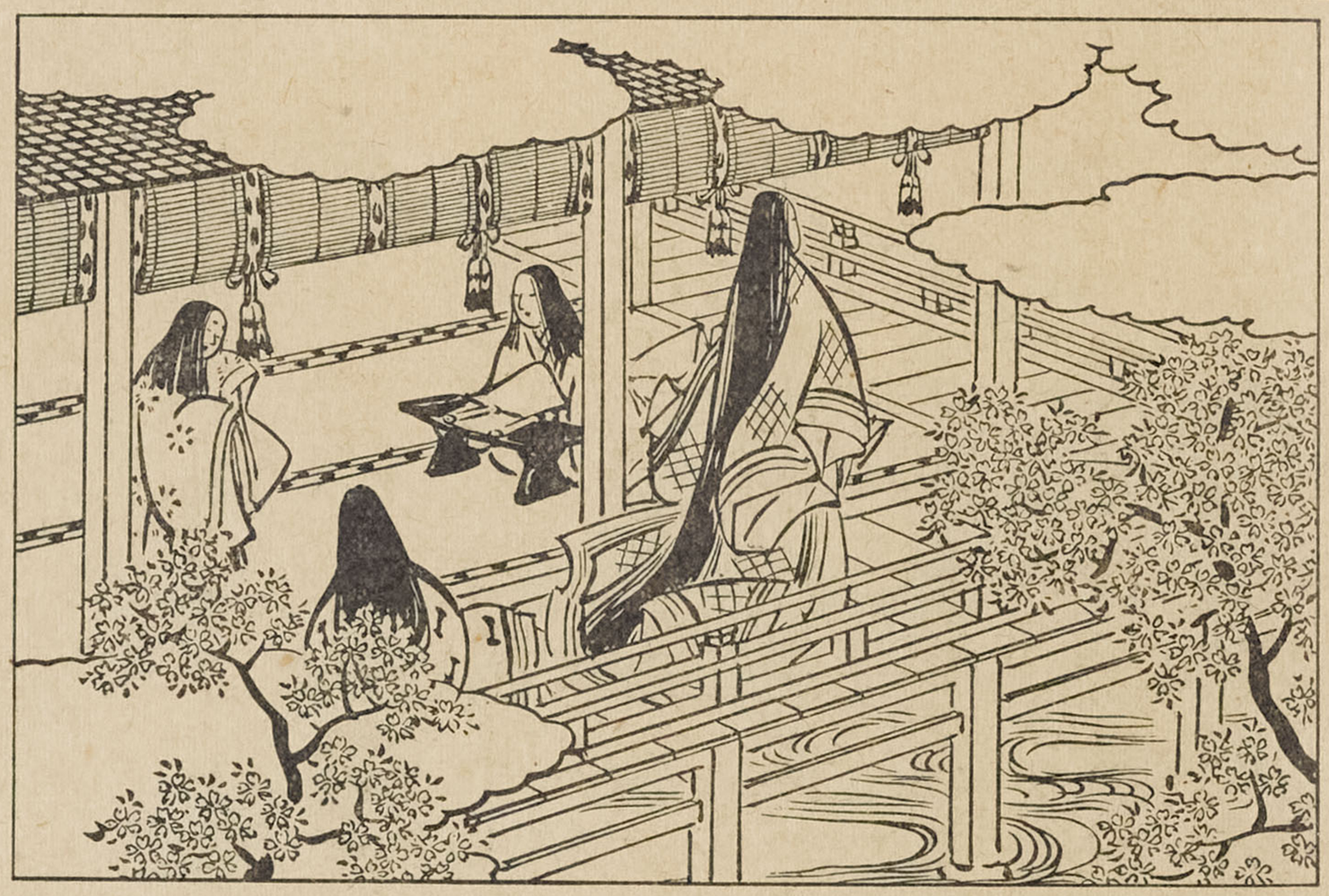
「雀の子を、あの犬君が逃したの。かごに伏せて置いたのに。」

と、女の子は、さもくやしさうである。

そばにゐた女の一人は、

「まあ、しやうのない犬君ですこと。うつかり者だから、ついゆだんをして逃したのでせう。せつかくなれて、かはいくなつてゐたのに。鳥にでも取られたらどうしませう。」

かう言つて、雀を探しに立つて向かふへ行つた。それは、此の子の乳母であるらしい。



尼さんはものの靜かに、
「いやもう、あなたはまるで赤
ちやんですね。どうして何
時までもかうなんでせう。
わたしがこんなに病氣で、何
時とも知れない身になつて
ゐるのに、あなたは雀の子に
夢中なんですか。生き物を
いぢめるといふことは、佛様
のないことだと、ふだんから
教へて上げてあるでせう。さあ、こ

撫

おすわりなさい。」

子供は大人しくすわつた。　尼さんは子供の髪を撫でながら、

「櫛（くし）を使ふことをおきらひだが、それにしては、まあ、何といふよい髪でせう。　でも、かう何時までも赤ちやんでは困りますよ。　もう、あなたぐらゐになれば、もつともつと大人しいはずです。　さう〳〵、なくなられたあなたのおかあさんは、十二の時おとうさんをおなくしでしたが、それはそれは、よく物がおわかりでしたよ。　今にでも此のおばあさんがゐなくなつたら、一體あなたはどうなさらう

といふのでせう。」

さすがに子供は、じつと聞きながら目を伏せてゐたが、とう〳〵うつ伏せになつて泣入つてしまつた。とたんに、美しい髪がはら〳〵と前へこぼれかゝる。

（二）

それから一年程過ぎた。尼さんは去年の秋とうとうなくなつて、孫の紫の君は、たつた一人此の世に残されてしまつた。

不幸な紫の君は、源氏の君のうちに引取つて養はれることになつた。

年の若い源氏は、小さい妹でも出來たやうに、いろ

尋國十一

いろと紫の君のめんだうを見てやつた。

源氏をほんたうのにいさんだと思ふ程、したしくなつた。

つかし、紫の君は、今でもおばあさんのことを思ひ出しては、時々泣いてゐる。　此の不幸な子を、どうしたらなぐさめてやることが出來るか、源氏は何時もそれを考へねばならなかつた。

今日も源氏は紫の君に畫を書いて見せた。

最後に女の畫を書いて、其の鼻を赤くぬつて見せた。　紫の君は思はず笑ひ出した。

源氏は筆の先に赤い繪の具をつけて、鏡を見ながら、自分の鼻をいたづらに赤くぬつて見せた。紫の君は、どう〳〵笑ひこけてしまつた。

「わたしの鼻が、ほんたうにかう赤かつたら、どうだらうね。」

「まあ、いやなことをおつしやる。」

紫の君は、繪の具がほんたうにしみ込んだら、にいさんがお氣の毒だと思つた。源氏はわざと拭いたまねをして、

「ほら、すつかりしみ込んでしまつた。落ちないよ。」

と言つて、まじめな顔をしてゐる。

紫の君はさも心配さうに、水入の水を紙にひたして、源氏の鼻を拭きにかゝつた。

「いや〳〵、赤い方がまだ増しだ。此の上、墨でも附いて黒くなつたら大變ぢやないか。」

「すつかり落ちましたよ。」

「落ちた。それは有難い。」

さつきまで泣いてゐた紫の君は、すつかり晴れやかになつてゐた。

外はうらゝかな春の日である。木々の梢がぼうつとかすんでゐる中に、とりわけ紅梅が美しくほゝ

尋國十一

第五　法隆寺（ほふりゆう）

ひたすらに法隆寺へとあこがれる私の心を乗せて、乗合自動車は、でこぼこの道をかなり快く走つた。其の終點が南大門でである。

しばし門前にたゝずみながら、其の長方形の入口を通して、やゝ遠くに二層造の中門を望んだ。左の高い松の木立の後には、どうやら五重の塔の影もみとめられる。まるで南大門といふ額縁（がくぶち）にはめ込んだ美しい畫だと私は思つた。

をどる心をおさへるやうに、私は靜かに足を運ん

第五　法隆寺

やうに、極めてあらはだ。　中門と、塔と、金堂と、其の入此の門は、間口が柱間四間で、其の中央二間が入口になつてゐる。　柱を眞中にして兩側に入口のあるのが、他に例のない形でありながら、何等そこに不自

然を感ぜしめない。柱は、すべて眞中邊から下へかけて、著しくふくらみを持つた丸柱であるる重みを受けて、力強く、うんと支へた感じを、最もよく此のふくらみに見ることが出來る。

門の奥行が柱間三間であることも、すてゐる。如何に壯大華麗な門でも、奥行二間が普通であるのに、此の中門は三間になつてゐる。其の幅と共に深さを持つ美觀に、私はしばし吸附けられざるを得なかつた。

中門をはいると、左に五重の塔が大空高くそゝり立ち、右に金堂が莊嚴にひかへ、其の奥、正面に講堂の

雄大な姿が見られる。周圍を廻らす廻廊（くわいらう）も人の心を引かずにはみない。特に、此の高い塔と莊嚴な金堂とが、不思議によく調和して、こゝに美の中心を形作つてゐるのである。

先づ塔を仰ぐ。日本に二つとない美しい塔がこれである。二層は初層より、三層は二層より著しく

縮小して、第五層は初層の二分の一になつてゐる。だから、此の塔ぐらゐ、どつしりと落着いて見えるものはない。しかも、どつしりとしたものは、やゝもすると重苦しさを以て迫るのに、此の塔は軽快で長く張出してゐる。軒とい ふ軒は、まるで天上に舞上るやうに、なだらかな曲線をゑがいてゐる。屋根といふ屋根は、天女の羽袖のやうに、これも不思議に私たちをおさへつけようとしないで、こゝに其の屋根は、あたかも飛行機の翼のやうな落着きと軽さを見せてゐる。

金堂はもちろん荘厳な大殿堂であるが、それでゐ

殊に、初層に比して第二層

追慕

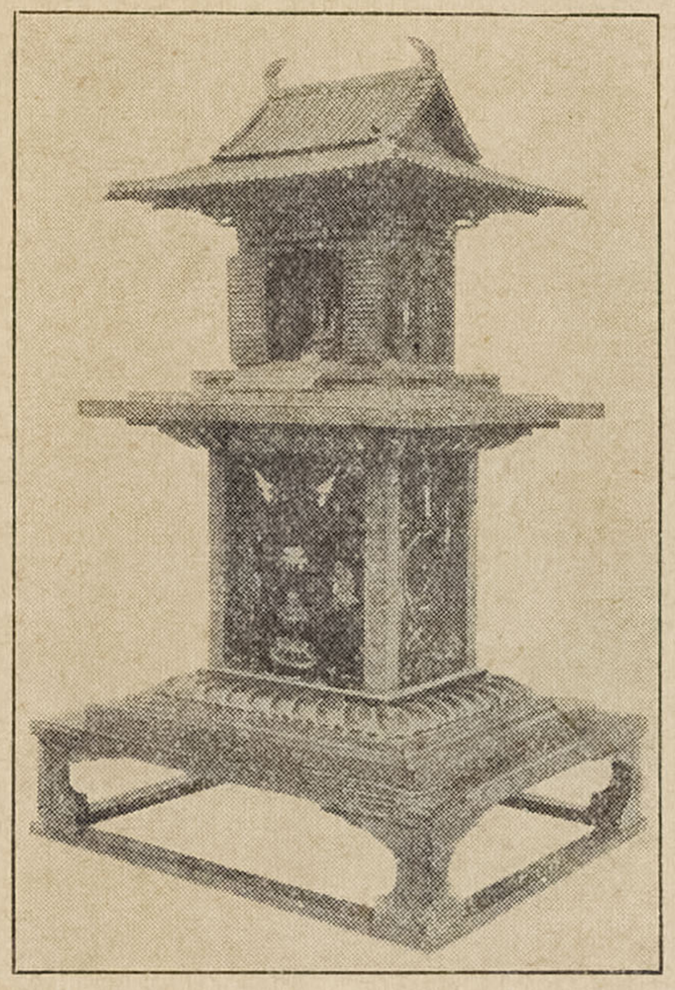
の輕快な感じがたまらない程よい。

私は、建築の美しさから轉じて金堂にはいつた。先づ仰がれる藥師（やくし）の尊像に、深い心の感動を覺える。それは、聖德（しやうとく）太子が御父君用明天皇を追慕し給ふ餘りに作らせられたもので、實に太子御孝心の結晶であり、さうして、それが又法隆寺といふ美の殿堂を現出したゆゑんである。それと並んで釋迦（しやか）三尊を拜するのは、太子の御子山背（やましろの）

大兄王（おほえのわう）が、御父君にかたどつて等身の御佛とし給うたもので、こゝにも同じ孝の御心がしのばれる。何れも、名工鳥佛師の作として古藝術（げいじゆつ）のかをりゆかしく、威嚴の中に、しみ〴〵と慈悲の御相を拜するのであるが、今さういふことを考へるのは、餘りにもつたいない氣がする。

法隆寺が約一千三百年の古き姿を其のまゝに今日に傳へて、最古最美の木造建築を世界に誇り得るのは、全く一つの奇蹟（きせき）であつて、しかも太子の御孝心を思へば、あながち偶然（ぐうぜん）でない氣がしてならない。

堂内の美と莊嚴は、たゞこれだけではない。　壁上



にゐがかれた壁畫の數々、それはもちろん所々はげ、壁も龜裂（きれつ）を生じてはゐるが、そこに現れた諸佛・諸尊の御姿は、極めて生き〳〵と、自由に、美しくも尊くも拜される。

更に推古（すゐこ）天皇の御念持佛であつたといふ有名な玉蟲の御厨子（づし）が、私たちの心を引く。其のすかしぼりの金物の下に、玉蟲の羽が敷並べられ、其の美しい光彩が、金色の金物のすかしを通して見られたのであるといふ。

今は金物も古び、扉（とびら）や臺にゐがかれた

畫のみが色をとゞめてゐるが、當時は、形の美と相待つて、輝かしい色彩がどんなに尊く拜されたことであらう。

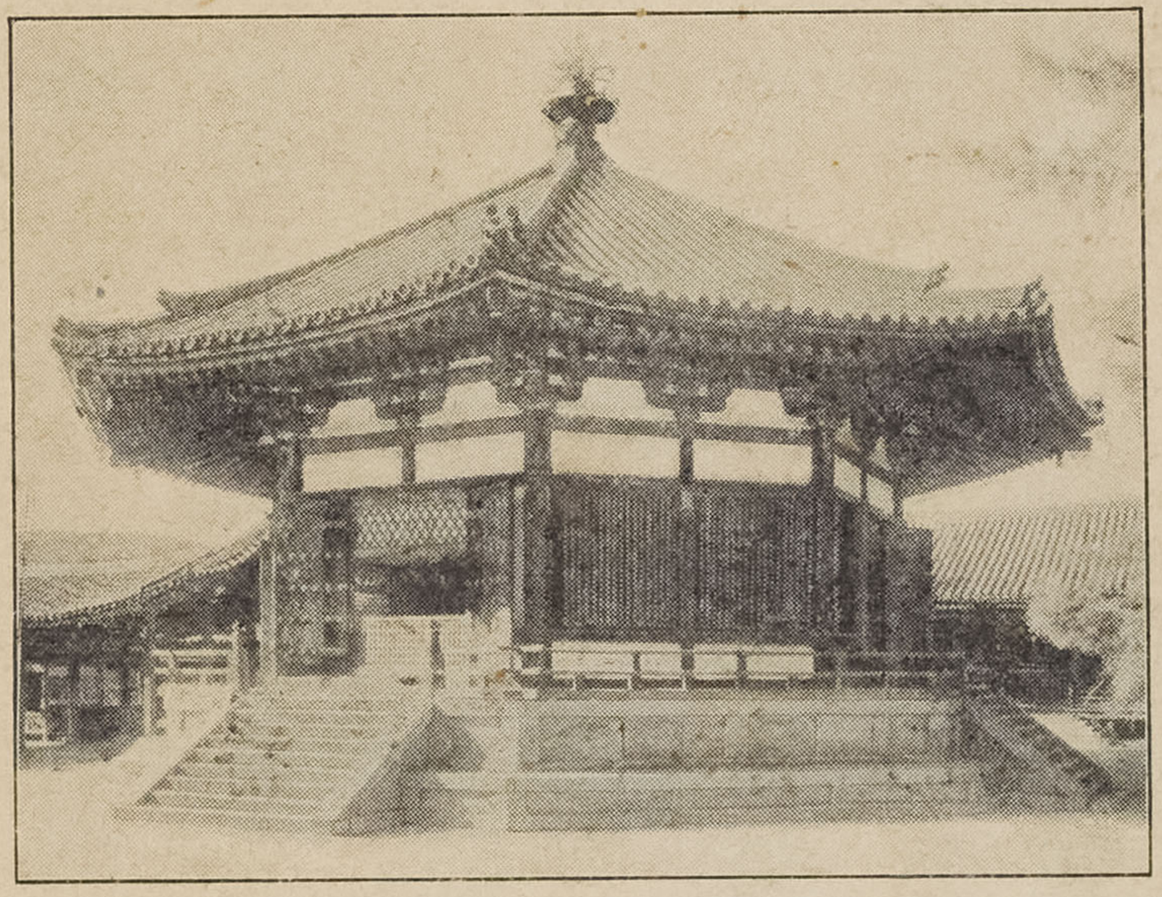
東大門から出て東院へ行くと、そこに境があつた。廻廊・殿堂に圍まれた中庭にある夢殿は、我が國で一番美しい八角圓堂だといはれてゐる。夢殿とは、何といふゆかしい名であらう。

地に聖徳太子の宮殿斑鳩宮があつた。

宮殿の一室で憲法十七條を書かれ、又佛教の研究をせられたのである。

其の如何に深く思をおこらしになつたかは、夢に金人が現れて太子にさゝやき奉つたのでも

富



つたと傳へられてゐるのでもわかる。　夢殿の名は、そこから起つたのであらう。　本尊觀世音は、今秘佛として、當時の太子の御姿を語りがほに、此の堂内に安置されてゐるのである。

東院を出て、私は又乘合自動車に乘つた。

車は、しばし富の小川に沿うて走る。と、晩春の夕もやの中に、夢殿が次第にとくのが見られる。　私は幾度か

いかるがや富の小川の絶えばこそわがおほきみの御名を忘れめ

古歌を口ずさんで、太子をしみぐ〳〵としのび奉るのであつた。

第六　五月の太陽

五月の太陽は、

あらゆる梢に降りそゝいで、

或物は潑剌たる鮮緑に、

或物は明朗なひわ色に、

或物はやゝ鈍重な茶褐色に、

戯嬉　撫　舞　亂（乱）

それ〴〵のいみじき色彩を
あかんなく映發せしめつゝ、
天地に新緑の香を滿ちたゞよはしめて
五月の太陽は、
ほがらかに、力強く、
波打つ麥畠にをどり、
目ざめるやうな野菜畠に亂舞し、
苗代（なはしろ）の青田を愛撫し、
農夫の鍬（くは）の先に嬉戯し、
茶摘（ちやつみ）少女（をとめ）の手先を祝福しつゝ、
ある。

尋國十一

蠶　戲

限りなき希望と榮光を田園に投ずる。

さうして、五月の太陽は、

農家の藁屋根に光彩を與へ、

其の緣先に小猫を戲れさせ、

其の蠶室を明かるくし、

薄暗い物置にさし込み、

鷄小屋の奥にしのび入つて

今、生まれたばかりの卵に、

輝かしい生氣を吹き込む。

嫁　夏

第七　姉

今日、ねえさんがお嫁入する。さう思ふと心がちつとも落着かなかつた。先生のおつしやることが、つい私の耳をす通りする。教室の外は、うらゝかな初夏だ。屋根で雀がちゆうちゆう鳴いてゐる。あの雀は、のんきでいゝなあ。ほんたうに、あのねえさんが、よその人になつてしまふのかしら。何だかうそのやうだ。――と思ふとたん、はつとした。先生の目が、みんなの笑つた顔が、私に集つてゐる。先生が私に何かおつしやつたらしい。顔が火のやうにな

るのを私は感じた。

午後、急ぎ足で學校の門を出た。歸口に下駄が幾足も並んで、奥ではがやく〳〵人聲がする。

髪結さんが、一生けんめいに、ねえさんのお支度をしてゐるところだつた。島田に結つて見ると、入せられたねえさんは、まるでよその人のやうに見える。分家のをばさんが、裾模様を着る。

「あゝ、いゝお嫁さんが出來ました。」

と言つて、ほめてゐる。

おかあさんも、そばでにこにこしながら眺めてゐた。

お座敷では、山田のをぢさんとをばさんが、おとうさんや分家のをぢさんなどと話をしてゐる。

何だかさびしい氣がして、私は自分の部屋へもどつた。心を無理にしづめようとして雜誌を開いたが、文字も畫もみんなふすまがすうとあいて、着飾つたねえさんがはいつて來た。

「雪ちやん」。

少しかすれた聲だつた。

「ねえさん、おめでたう」。

やつと、これだけが私の口から出た。

「ありがたう。　私がゐなくなつても、さびしがらないで、よく勉強して下さいね。」

「はい。」

たさう言へば、よくねえさんに復習や宿題を見て頂いたものだつた。

「生まれた家を出て行くのはいやですけれど、これが女の行くべき道なんですから。どうぞ私に代つて、おとうさんやおかあさんを大事にして上げて下さいね。殊におかあさんは、さうお丈夫ではないんですから。」

私はだまつてうなづいた。「ねえさん、これまで、ず

ゐぶん我がまゝを言つてすみませんでした。」それがのどまで出てゐるのだけれど、とう〳〵言へないでしまつた。

夕方、迎への自動車が來た。　ねえさんは、山田のをぢさん・をばさんと一しよに車に乗つた。

其の夜、おとうさんも、おかあさんも、口ぐせのやうに「めでたい、めでたい。」と言ひながら、話はとだえがちであつた。　にいさんだけが、時々へうきんなことを言つて、みんなを笑はせた。

第八　電話の發明

アメリカ合衆國（がつしゅう）ボストン市の聾啞（ろうあ）學校に、一人の若い先生がゐました。

此の先生がまだ十五歳の少年であつた頃、ふと人間の聲といふものの不思議さに氣附きました。

「人間は、くちびるや舌を動かして、いろ〳〵變つた音聲を出すが、考へてみると實に不思議だ。」

彼は妙な物を作り始めました。一年かゝつて出來上つたのが人間の頭のやうなもので、ふいごで風を吹込むと、ゴムのくちびるが動いて、生きた人間のやうに聲を出す仕掛になつてゐました。

かういふやうに、小さい時から研究心の強かつた

振便

先生のことですから、聾啞學校で氣の毒な子供たちを教へるやうになると、いよ〳〵熱心に、聲の原理や舌・くちびる・耳などの生理を勉強しました。

しかし、何分にも耳や口の不自由なる子供たちのことですから、教へる方も、並大抵の苦心ではありませんでした。

先生は、何とかして此のかはいさうな子供たちのために、便利な機械を作りたいと思ひました。

さうして、話をする時に起る空氣の振動を目で見る機械の工夫をしたり、又は其の頃評判になつてゐた電信機械を研究したりしました。

其の中に、ふと別の考が先生の頭に浮かびました。

「電信は、電氣の作用によつて、點や棒の符號を用ひて通信するものだが、此の符號の代りに人間の聲を用ひることは出來ないか。」

これに思ひ至ると、先生はもう矢もたてもたまりませんでした。すべてを捨てて、トーマス・ワトソンといふ助手と一しよに、ボストン市の或電氣屋の屋根裏にたてこもりました。さうして、話と電氣とを結び附けようといふ風變りな研究に取りかゝつたのです。

ところが、元來先生は電氣や電信の學者ではありませんでしたから、研究が行きづまると、專門の學者

其の中にふと別の考が先生の頭に浮かびました。

にすがつたり、友達に意見を聞いたりしなければなりませんでした。中には其の研究をばかにして、

「又もの言ふおもちやの話か。電氣に話をさせよと、相手にしない友達もありました。

或日のこと、先生は、知合の醫者から人の耳をもらつて來て、氣味の惡い實驗を始めました。

先づ一本の藁を持つて來て、其の一方を耳の鼓膜に觸れさせ、他の一方をすゝのかの上に置きました。先生は、其の耳に向かつて息を吹きかけたり、歌を歌つたりしました。すると、其の

度毎に耳の鼓膜が振動して、藁がかすかに動きます。

さうして、すゝのかゝつたガラスの面には、ぎざ〳〵の線がゑがき出されるのでした。

其の様子を注意深く眺めてゐた先生は、此の鼓膜の代りに、薄い鐵で圓板を作つて、それを電氣で振動させたらどうかと考へました。此の考こそ、やみの中に光明でした。

月日が矢のやうに流れ去りました。

惡い實驗から、やがて三年目の夏がやつて來ました。

研究室の窓の外には、木々の葉が一日毎に緑を增し

て、風にそよいでゐます。

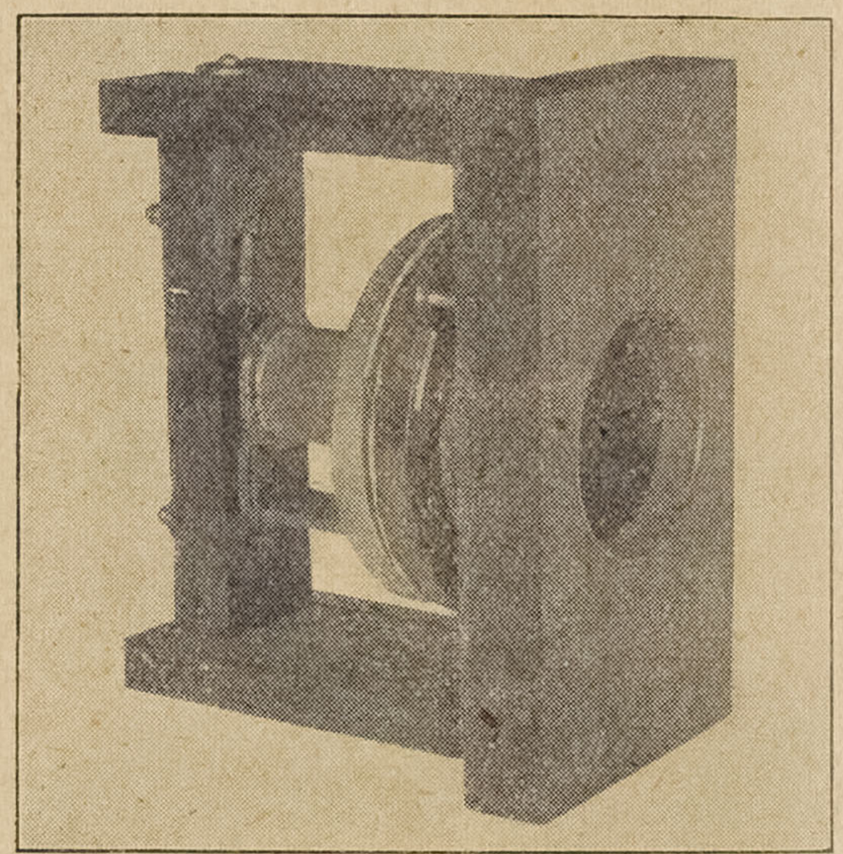
今日も相變らず、針金や、磁(じ)

石(しゃ)や、時計のぜんまいなどを取附けた機械を相手に、「もの言ふおもちや」の研究に餘念がありません。隣の室では、助手のワトソンが、先生の機械と電線で連絡した別の機械を調べてゐます。

其の時です。「ボーン」といふかすかな音が、電線を傳つて先生の機械に響きました。先生は、びつくりして飛上りました。さうして、ワトソンの室へかけ込むが早いか、

「君、今どうしたんだ。其の機械を動かしてはならん。」

と、どなりながら機械にかけ寄りました。　先生の手



血の出るやうな苦心が、又續けられました。

やがて年が變り、どうく」「もの言ふおもちや」の出來上る日がやつて來ました。研究はもう一息と云ふところです。

日です。少し震へを帶びた先生の聲が、機械に向かつて話しかけます。

「ワトソン君、すぐ來てくれ給へ、用事があるから。」

は震へてゐます。

「もの言ふおもちや」は、遂に電線にたよつて、かすかながらも音を傳へたのです。

いい

耳をすまして待つてゐた隣のワトソンは、其の時思はず機械を取落しました。無理もありません。彼は、ほんたうに針金を通じて、人間の言葉を聞いたのです。彼は、急いで先生の室に飛込みました。

「聞えました、聞えました。先生の言葉が、一々はつきり聞えました。」

二人は、はげしく抱合ひました。

これは、西暦千八百七十六年三月十日のことです。「も」の言ふおもちや」とは、言ふま

でもなく電話のことです。電話を發明した此の先生こそ、アレキサンダー・グラハム・ベルで、此の發明は、ベルが三十歳の時のことでした。

第九　瀬戸内海

本土の西、近く九州と相接せんとする所、佐田岬長く突出で、九州に迫りあり。四國の西には伊豫灘海峽をなす。紀淡海峽となり、四國に近き所鳴門海峽となる。此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

の言ふおもちや」とは言ふま

鮮

瀬戸内海には至る所に岬あり、灣あり。大小無數の島々各所に散在す。船の其の間を行く時、島かと見れば岬なり岬かと見れば島なり。ざるに一島更に現れ、水路きはまるが如くにしてまた忽ち開く。かくして島轉じ海廻りて、其の盡くる所を知らず。

春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目ざむるばかり鮮かなり。兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、まうせんを敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて

古

第九　瀬戸内海

内海の沿岸及び島島（しま）がくれ行く白帆の影ものどかなり。月影のさゞ波に砕け、島は古より日本三景の漁火の波間に出没する夜景も屋島・壇浦（だんのうら）は源平の昔また一段のおもむきあり。

瀬戸内海の沿岸には、大阪・神戸（かう）・宇野（うの）・尾道（をのみち）・宇部（うべ）・高松・今治（いまばり）等良港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙のたなびくを見る。両々には名勝の地少からず。嚴（いつく）

だ切なり。　我が國に遊べる外國人は、早くより内の風光を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。　今日、瀬戸内海が國立公園の一に數へらる、、またむべなりといふべし。

第十　日本海海戰

露國が連敗の勢を回復せんため、本國における海軍のほとんど全勢力を擧げて編成せる太平洋第二。第三艦隊は、朝鮮海峽を經てウラヂボストツクに向かはんとす。　我が海軍は、初より敵を近海に迎へ撃つの計を定め、豫め全力を朝鮮海峽に集中してこれ

鬪

を待つ。

明治三十八年五月二十七日午前四時四十五分、我が哨艦（せうかん）信濃丸（しなのまる）より、無線電信にて「敵艦見ゆ。」との報告あり。東郷司令長官は、直ちに全軍に出動を命じ、先づ小巡洋艦をして、敵艦隊を沖島（おきのしま）附近にいざなひ寄せしむ。

午後一時五十五分、我が旗艦三笠（みかさ）は戰鬪旗をかゝぐると共に、信號旗を以て令を各艦に下せり。いはく、

「皇國の興廢（こうはい）此の一戰にあり。各員一層奮勵（ふんれい）努力（どりよく）せよ。」

距

砲火を開始せしが、我はこれに應ぜず、距離六千米に近づきて始めて應戰し、烈しく敵を砲撃せしかば、敵と。我が軍の士氣大いに振るふ。三笠に乘れる東郷司令長官は、六隻の主戰艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭なる敵の主力に當り、片岡・出羽・瓜生・東郷（正路）の諸隊は、敵の後尾をつく。

敵の先頭部隊は直ちに

逃　熟着　亂

の艦列忽ち亂れ、早くも戰列を離るゝもの あり。

風叫び海怒りて、波は山の如くなれども、沈着にして熟練なる我が砲員の打出す砲彈は、よく敵艦に命中して、續々火災を起し、黑煙海をおほふ。午後二時四十五分、勝敗すでに定まれり。敵はかなはじと、にはかに路を變へて逃れ去らんとす。我は急に其の前路をさへぎりて攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦を始め、其の他の諸艦も多く相ついで沈沒せり。夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艇隊は、砲火をくゞつて敵艦に迫り、無二無三に攻撃せし

かば、敵艦隊は四分五裂の有様となれり。

明くれば二十八日、天よく晴れて海上波靜かなり。我が艦隊は、東郷司令長官の命により鬱陵島附近に集りて敵を待ちしが、忽ち東方に當りてはるかに數條の黒煙を見る。よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は、直ちに東方に向かつて敵の進路をふさぎ、片岡・瓜生・東郷の諸隊は、其の退路を絶ちて、午前十時十五分、全く敵を包圍せり。

敵將ネボカトフ少將、今は逃れぬところと覺悟したりけん、にはかに戰艦ニコライ一世以下四隻を擧げて、其の部下と共に降服せり。

敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將は、昨

獲捕

日の戰鬪に傷を負ひ、幕僚と共に一驅逐艦に移りしが、我が驅逐艦漣陽炎のらるゝに至れり。

此の兩日の戰に、敵艦の大部分は、我が艦隊のために、或は擊沈せられ或は捕獲せられて、三十八隻の中逃れ得たるもの巡洋艦以下數隻のみ。

び捕虜は、司令長官以下一萬六百餘人。我が軍の死傷甚だ少く、艦艇の沈沒したるものわづかに水雷艇三隻に過ぎず。

東郷司令長官の發せし戰況報告の末尾にいはく、

「我ガ聯合艦隊ガ能ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績

ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威(ミイツ)ノ致ス所ニシテ、固(モト)ヨリ人爲(ジンキ)ノ能クスベキニアラズ。

特ニ我ガ軍ノ損失・死傷ノ僅少(キンセウ)ナリシハ、歷代神靈(シンレイ)ノ加護ニ由(ヨ)ルモノト信仰(シンカウ)スルノ外ナク、曩(サキ)ニ敵ニ對シ勇進敢戰(カンセン)シタル麾下(キカ)將卒(シヤウソツ)モ、皆此ノ感激(カンゲキ)ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノ如シ。」

と。勝報上聞に達するや、司令長官にたまへる勅語の中に、

「朕(チン)ハ汝等ノ忠烈ニ依(ヨ)リ、祖宗(ソウ)ノ神靈ニ對(コタ)フルヲ得ルヲ懌(ヨロコ)ブ。」

泣

と仰せられたり。將兵、すべて感泣せざるはなかりき。

第十一　皇國の姿

天照らす神のたまはく、
「葦原の中つ御國は、
皇孫の治むべき國、
御位はいやさかえまし、
天壤ときはみなからん」。

大神のみことのまゝに、

幸和

日に月に進みて止まぬ
敷島の日本の國の
人の世の力はなべて、
高皇産靈・神皇産靈の、
かしこしや、産靈のみわざ。

神の御子、代々のみかどの
しろしめす我が日の本は、
神と人和らぎむつび、
天と地とはに幸あり。

第十二　古事記の話

元明天皇の勅命によつて、太安萬侶は、稗田阿禮が
そらんずる我が國の古傳を、文字に書きあらはすこ
とになつた。
阿禮は記憶力の非凡な人であつた。彼が天武天
皇の御禮は記憶を讀み、古い言傳へをそらんじ始めたのは、三十餘年前のことで
ある。當時二十八歳の若盛りであつた彼が、今では
もう六十近い老人になつた。此の人がなくなつたら、我が國の正しい古傳、つまり神代以來の尊い歷史

も文學も、彼の死と共にほろびてしまふかも知れないのであつた。

勅命の下つたことを承つた阿禮は、今や天にも上る心地であつたらう。　さうして、長い〳〵物語を讀上げるのに、殆ど心魂を捧げつくしたことであらう。

ところで、これを文字に書きあらはす安萬侶の苦心は、それにも増して大きいものがあつた。

其の頃は、まだ片假名も平假名もなかつた。　文字といへば漢字ばかりで、文章といへば漢文が普通であつた。　しかるに、阿禮の語る物語は、すべて我が國の古語を、漢字ばかりで

其のまゝに書きあらはすことが、安萬侶に取つての大きな苦心であつた。

試みに、今日若し片假名も平假名もなしとしたら、どうなるであらう。「クサキハ」を漢字だけで書けば、差當り「草木青」と書いて満ふのほかりで、我々の日常使ふ言葉を書きあらはさうをかし、これでは、漢文流に「サウアヲイ」と讀むことも出來る。そこで、ほんたうに間違なく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かねばなるまい。しかし、これでは、漢字だけで書けば、差當り「草木青」と書いて満ふのほかりで、我々の日常使ふ言葉を書きあらはさうをかし、これでは、漢文流に「サウアヲイ」と讀むことも出來る。そこで、ほんたうに間違なく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かねばなるまい。しかし、これでは、漢字だけで書けば、差當り「草木青」と書いて満ふのほかりで、我々の日常使ふ言葉を書きあらはさうをかし、これでは、漢文流に「サウアヲイ」と讀むことも出來る。そこで、ほんたうに間違なく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かねばなるまい。

だが、これでは又あまりに長過ぎて、讀むのにかへつて不便である。

例言　簡單

安萬侶は、いろ〳〵の方法を用ひた。例へば、「アメツチ」といふのを「天地」と書き、「クラゲ」といふのを「久羅下（クラゲ）」と書いた。前者は「クサキ」を「草木」と書くのと同じであり、後者は「久佐幾」と書くのと同様である。「ハヤスサノヲノミコト」を「速須佐之男命（ハヤスサノヲノミコト）」としたのは、「草木」と「久佐幾」とを二つの方法を一しよにしたのである。これらは簡單な名前に過ぎないが、長い文章になると、其の苦心はほとても一通りのことではなかつた。

しかし、安萬侶のかうした苦心はやがて報いられて、阿禮の語る所を、言葉其のまゝに文字に書きあら

はすことが出來た。　さうして、三卷の書物にまとめて天皇に奉つた。　これが古事記といつて、いはば我が國で最も古い書物である。　和銅五年正月二十八日、今から一千二百餘年の昔のことである。

天（あめ）の岩屋、八岐（やまた）のをろち、大國主命（おほくにぬしのみこと）、天孫降臨（かうりん）、二つの玉等の神代の尊い物語を始め、神武天皇や日本武尊（やまとたけるのみこと）の御事蹟（じせき）、其の他古代のすべての事が古事記にのせられて、今日に傳はつてゐる。

それは、要するに我が國初以來の尊い歴史であり、文學である。　殊に大切なことは、かうして我が國の古傳が、古語のまゝに殘つたことである。　古語には、

我が古代國民の精神がとけ込んでゐる。日古事記を讀んで、國初以來の歴史を知ると共に、其の言葉を通して、古代日本人の精神をあり〳〵と讀むことが出來るのである。

第十三　松阪の一夜

本居宣長（もとをりのりなが）は、伊勢（いせ）の國松阪の人である。若い頃から讀書が好きで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

或夏の半ば、宣長がかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、

と

「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいとお話しになる江戸の賀茂眞淵先生が、先程お見えになりました。」

「先生がどうしてこちらへ。」

「何でも、山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのだそうです。あの新上屋にお泊りになつて、さつきお出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、お立寄り下さいました。」

「それは惜しいことをした。どうかしてお目にかかりたいものだが。」

「後を追つてお出でになつたら、大てい追附けませう。」

宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞取つて後を追つたが、松阪の町のはづれまで行つても、それらしい人は見えない。次の宿の先まで行つてみたが、やはり追附けなかつた。宣長は力を落して、すご〳〵ともどつて來た。さうして新上屋の主人に、萬一お歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

訪

望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。二

人は、ほの暗い行燈（あんどん）のもとで對坐した。

七十歳に近く、いろ〳〵りつぱな著書もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘りで、溫和な人となりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる少壯の學者。年こそ違へ、二人は同じ學問の道をたつてゐるのである。だん〳〵話をしてゐる中に、眞淵は宣長の學識の尋常でないことを知つて、非常に賴もしく思つた。

話が古事記のことに及ぶと、宣長は、

「私は、かねぐ〳〵古事記を研究したいと思つてをります。それについて、何か御注意下さることはご

ざいますまいか。」

「それは、よいところにお氣附きでした。　私も、實は早くから古事記を研究したいと考はあつたのですが、それには萬葉集（まんえふしふ）を調べておく事が大切だと思つて、其の方の研究に取りかゝつたのです。　ところが、何時の間にか年を取つてしまつて、古事記に手をのばすことが出來なくなりました。　あなたはまだお若いから、しつか

り努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

のは、順序正しく進むといふことです。これは、學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一歩々々高く登り、最後の目的に達するやうになさい。」

夏の夜はふけやすい。老學者の戸は、もう皆とざされてゐる。家々の戸は、もう皆とざされてゐる。

の希望に胸をどらせながら、ひつそりした町筋を我が家へ向かつた。

其の後、宣長は絶えず文通して眞淵の教を受け、師

弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松阪の一夜以後とう〳〵來なかつた。

宣長は眞淵の志を受けつぎ、三十五年の間努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

第十四　北海道

（一）　札幌

今朝早く札幌神社へ參拜すると言つて出掛けた東京の叔父は、僕が學校から歸つて見ると、緣先に出

した椅子(いす)によりながら、色づいたばかりの牛乳をかけて、さもおいしさうにたべてみた。

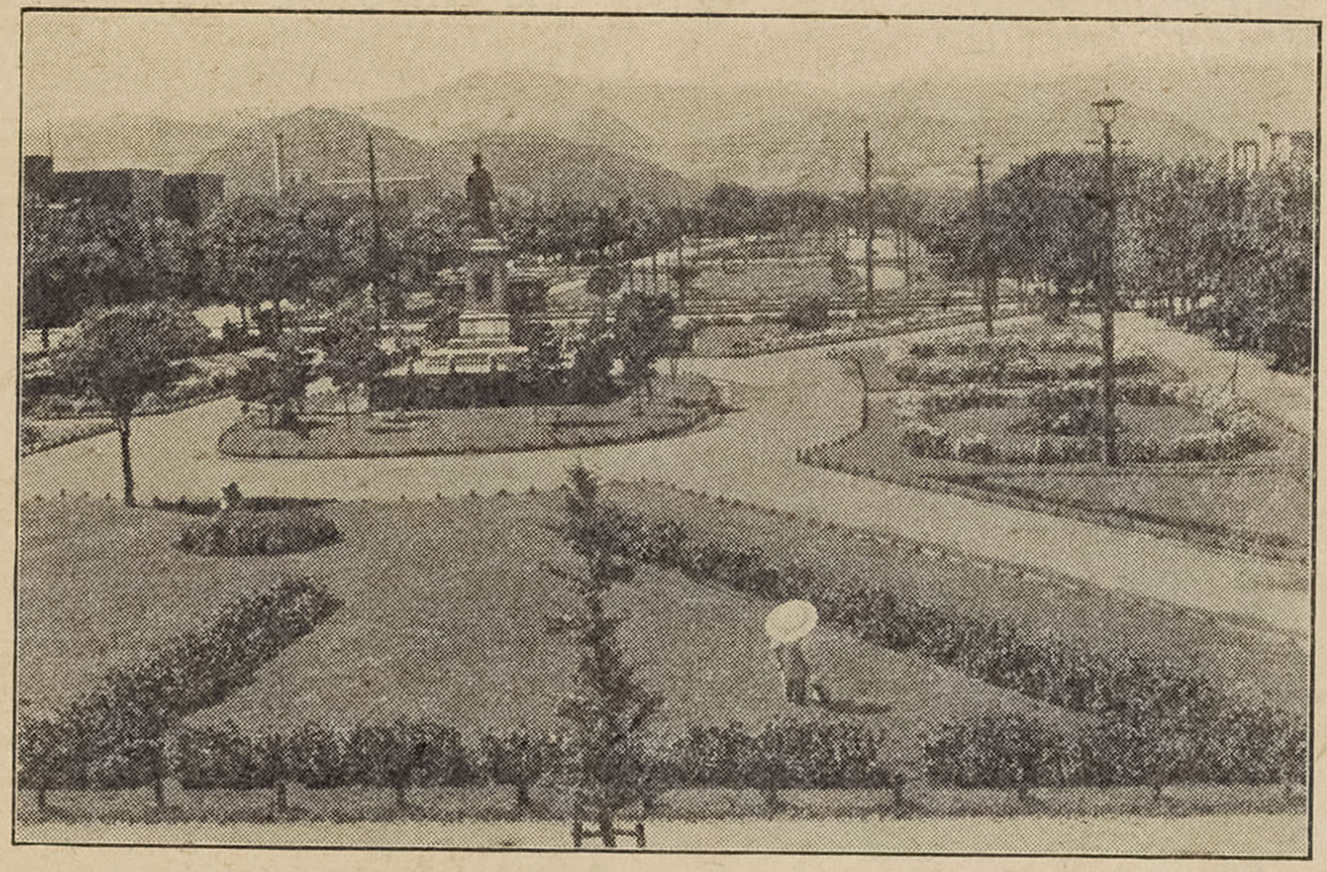
「叔父さん、北海道のいちごに北海道の牛乳をかけてたべると、ほんたうに北海道の味がするでせう。」

と僕が言ふと、

「北海道の味もいゝが、今朝、神社の森で聞いたかんこ鳥の聲は、實によかつたよ。あれを聞くと、全くたまらんね。」

と、叔父が言つた。叔父は、深い森の奥から流れて、すかにこだまするあのかんこ鳥の、朗かな中にも一種のさびしさを持つた聲が、餘程氣に入つたらしい。

編



内は、午後は、僕が案内役になつて、市の見物に出掛けた。六月の空白雲が光つてゐて、所々に淡い眞白い日がさのかげに芝生に腰をおろして讀書に餘念のない學生もあれば、自轉車を止めて野球試合の放送に聞入つてゐる一群もある。のそばでせつせと編物の針を運んでゐる婦人の姿

鐘

も見られた。

がら、白い花の房をつけたアカシヤの並木路を、叔父はステッキを思ひ切り振つて行く。

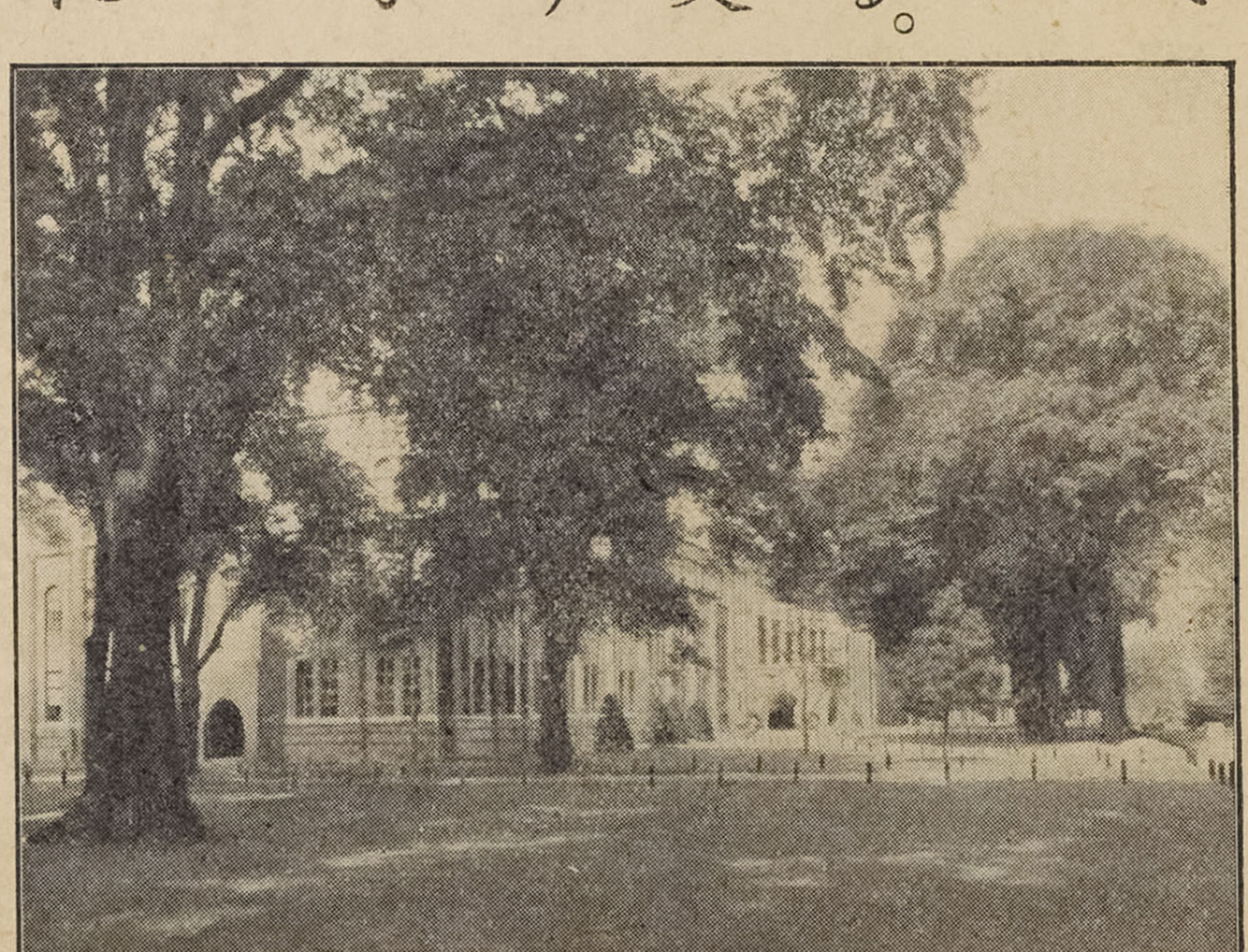
今しがた三時を告げた時計臺の鐘の音を追ひな

大學の正門を眞直にはいる。

面の芝生におほはれた校庭

を貫ぬく小さな流に、小魚をすくつて遊んでゐる子供たちがあつた。

緑したゝる一位の木を背に



し、見上げるやうなにれの葉かげに、青銅の胸像がくつきりと浮かび上つて見える。

「成程、これがクラーク博士の胸像だな。こゝに、英語で『少年よ、大志を抱け。』と記してある。これは、博士が札幌を去る時、泣いて別れを惜しむ學生たちに残したといふ有名な言葉だよ。道雄君、君も一つ大志を抱いて奮闘するんだね。」

叔父の言葉は、僕の胸に力強く響いた。

四方に太い枝をたれて、深い日かげを作つてゐるにれの林や、大空の雲をはくかと思はせるポプラの並木路をたどつて、牧舎の近くまで行くと、牧夫に追

食

はれながら、いう〳〵と道端の草を食んでやつて来る牛の一群に會つた。

肩を並べて、廣々としたノートをか、へた大學生が、見かけられた。

日は、やうやく手稻の連峯に傾いた。

の鐘が「かあん、かあん」と長く尾を引いて廣野の彼方へ消えて行つた。

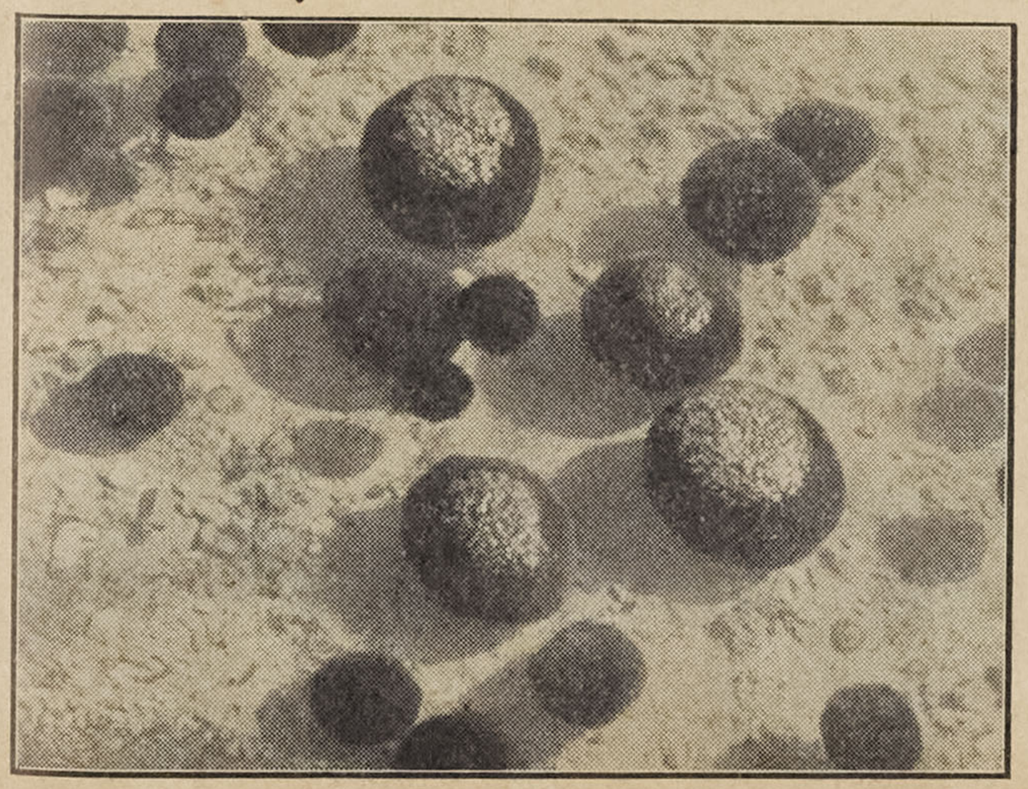
（二）阿寒（あかん）

釧路（くしろ）市の北方八十粁、雄阿寒岳（あかんだけ）の直下にたゝへる阿寒湖のほとりに來て、私は、始めて原始北海道の姿をまのあたりに見ることが出來た。

斜

澄

湖上に舟を浮かべて、雄阿寒岳の急斜面が迫る絶壁を仰ぎ、千古斧（をの）を知らぬ湖岸一帯の密林を見渡した時、私の心はすでに人間界を超越（てうゑつ）してゐた。湖上の島々も多くは密林を負うて、其の眺は美であり奇である。明澄の水はどこまでも冷やかに、やゝ暗い青さをたたへ、特に絶壁をなす奇岩の下には、底知らぬ淵をよどませてゐる。西



の空、や、遠く雌阿寒岳が煙を吐いて、其の紅褐色が、萬緑の世界に異彩を放つてゐる。その一角の底に、まるで緑色の炭團でも敷並べたやうな「まりも」をのぞいて見るのも、一興であつた。

「えぞまつ」「とゞまつ」の原始林の間に開かれた高原の道を自動車で東へ走ると、途中に雙湖臺がある。そこから見下す針葉樹林の海は、たゞ默々として聲なく續き、其の密林の傾斜が四方から集る底に、群青の水をたゝへてゐるのが、ペンケ・パンケ二つの湖であつた。

弟子屈から道を北へ取つて、屈斜路湖のほとりに

出る。　先づ和琴半島の優美な姿を賞しながら進むと、湖景は快く開けて、水上に美しい中島に秀麗な藻琴山を仰ぐ。

車は美幌峠を登りつめて、遂に一大展望をほしいまゝにする地點に私を下した。　南面は屈斜路湖を見下す彼方、釧路の高原・山岳がうねり續いて大波の如く、北面は廣々と北見の高原がゆるやかに遠く傾いて、其の果にオホーツク海の煙波を望ましめるのである。

再び弟子屈にかへして東する道は、私を摩周湖へみちびいた。

拔　澄　骨

摩周岳の中腹、海拔三百五十米の高所にある此の湖は、湖岸をめぐらす約二百米の絶壁上から見下さねばならない。脚下の水は、あくまでも澄みきつた碧玉（へきぎよく）の色をのべて、しかも死の如く沈默してゐる。中央に浮かぶたゞ一つの中島、カムイシュの鮮かさ。周圍の絶壁は、これも水際からぎつしりと密林を疊み上げ、所々「しらかば」の立枯れが、白骨のをど

頂永久

湧

るやうにあらはである。　對岸やゝ右に、けづり立つ峯は摩周岳の絶頂だといふ。　人は、永久に此の湖の水際に近附くことが出來ないかのやうに思はれる。昔、土地の人は、此の湖をカムイトーと呼んだ。　神の湖の意である。　まことに摩周湖こそは、たゞ神のみがしろしめす神祕境だといふ感じを深くさせる。

其の山岳は秀麗、其の湖は神祕、果しなき密林と、雄大な展望と、さうして、至る所に湧出する溫泉とをあはせ有する國立公園阿寒は、たゞに北海道の誇であるばかりでなく、まことに天下の絶勝だと私は思つた。

（三）　北千島の漁場

本島で、にしんの漁期の終る五月下旬から、そろそろ北千島の漁場が活氣を帶びて來る。其の前後けなげにも、十人乘そこ〳〵の發動機船が、本島を後に、六百海里の北を望んで續々と出て行く姿を見るであらう。

幸にして此の頃は、割合なぎこ、北千島の一角を根據地とする約百隻の流し網出漁船は、今、出動準備の最中である。エンジンの調子をしらべたり、網の支度をしたり、特に船長たちは、晴雨計と空模樣を熱心に見くらべてゐる。見渡す限りは午後の靜かな海である。

專網

やがて、船は爆音高く根據地を出て行く。　思ひ思ひに沖へ快走してかゝれこれ三時間、專らますのおよぎ廻つてゐさうな場所を探して、投網にかゝる。　つと速度を落しながら一直線に進む船のともから、網が次第にくり出されて、其の長さが約五千米。　此の作業が終る頃は、日没のおそい北洋にも夕暮が次第に迫つて、濃霧が一面に立ちこめる。　もたくからたゞよふやうに汽笛が聞えて來るのは、カムチヤツカ沿岸へ航する汽船であらうか。　一種のあこがれに似たなつかしさを覺えしめる。

「網の網をしつかりつないでおくんだぞ。　今夜は

適潮　諸任　揚

ふま船け

なぎらしいが、水温や海流はどうだい。」

「水温は紅ますに適度潮流は餘り速くないやうです。」

「昨夜より少し沖へ出たな。きつと大れふだぞ。」

もう〳〵たる濃霧にとざされて、網の綱の端に附けた目じるしのランプも、光がぼんやりと見える。

船はエンジンを止めたまゝ、網諸共に夜明まで潮のまに〳〵任せるのである。

かうして、北洋にたゞよふ小船のせま苦しい船室に、しばしの夢が結ばれる。

午前二時頃、もう東の空が白み始めるころ。

「おい、網を揚げるんだ。」

船長の聲に、防水具に身を固めた若者たちが、船室から出て來る。明方の風はいやといふ程冷たい。

「よいしよ、こらしよ。」

元氣のよい掛聲だ。網を引揚げる片端から、海面にさゞ波が起る。五六十糎のますやさけが、網の絲も切れんばかりにかゝつてゐるのだ。

力強くたぐりながら、すこぶるなれた手つきで魚をはづす。見る〳〵甲板はます・さけの山。かうした作業が五時間も續いて、一萬尾に近い漁獲に船は

滿載（まんさい）である。濃霧がだん〳〵薄れて、太陽が洋上に當鈍い光を投げかける。

船は、思ひ切り吃水（きつすゐ）深く、殘雪を頂く島山の峯を目當に、根據地へと波を切つて行く。

第十五　我は海の子

我は海の子、白波の
さわぐいそべの松原に、
煙たなびくとまやこそ、
我がなつかしき住家（すみか）なれ。

操

生まれて潮にゆあみして、
波を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を
吸ひてわらべとなりにけり。

高く鼻つくいその香に、
不斷（ふだん）の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を、
いみじき樂と我は聞く。

丈餘のろかい操りて、

腕

行手定めぬ波まくら、
百尋（ももひろ）・千尋（ちひろ）海の底、
遊びなれたる庭廣し。

幾年こゝにきたへたる
鐵より堅き腕あり。
吹く潮風に黒みたる
はだは赤銅（しやくどう）さながらに。

波にたゞよふ氷山も、
來らば來れ、恐れんや。

海巻き上ぐる龍巻も、
起らば起れ、驚かじ。

いで、大船を乗出して、
我は拾はん、海の富。
いで、軍艦に乗組みて、
我は護らん、海の國。

第十六　間宮林藏（りんざう）

樺太（からふと）は島なりや、又大陸の一部なりや、世界の人の久しく疑問とする所なりしが、其の實地を探檢（たんけん）して

解　狀　留　越

これが解決を與へたるは、實に我が間宮林藏なり。

文化五年四月、林藏は幕府（ばくふ）の命によりて、松田傳十郎と共に樺太に渡り、海岸を探りてほゞ島なることを知りぬ。　されど、なほ心に滿たざるものあり、同年七月單身にて又樺太におもむけり。

先づ樺太の南端なる白主にて土人をやとひ、小舟に乘りて北に進む。　途中の困難名狀すべからず。一度トッショカウに至りて引返し、トンナイに留りて越年し、翌年再び北に向かひて四月ノテトに着き、更に進みてナニヲーに達す。　此の地、北端に近き一小部落にして、土人の家わづかに五六を數ふるのみ。

緣　險　欲

ノテトよりナニヲーに至る間、大陸迫り、潮水南に流れ、波靜かなりしに、ナニヲー以北は海やうやく開け、潮水北に注ぎ、しかも波甚だ荒し。林藏、こゝに始めて樺太が大陸と全く絶縁せる島なることを確實にするを得たり。

林藏は樺太の海岸を一周せんと志ししが、ナニヲーより北、波荒くして舟をやるべからず。山を越えて東岸に出でんとすれば、土人の從者行手の危險を恐れて從ふことを欲せず。止むなくノテトに引返

し、酋長(しうちやう)コーニの家に留りて、しばらく時機の至るを待てり。

網をすき、舟を漕ぎ、魚を取る手傳ひなどして、土人に親しみつゝ、其の語る所を聞けば、樺太は島にして落點在するに過ぎずとぞ。こゝにおいて、林藏、新たに對岸大陸に入りて其の地を探檢する志を起せり。たま〳〵交易のため、コーニの大陸に渡らんとするに際し、林藏、切におのれを伴なはんことをこふ。コーニは「顏かたちの異なる君、若し彼の地に行かば、人に怪しまれ、或は一命も危からん。」とて、しきりに止む

れども林藏きかず。遂に同行することに決せり。

出發の日近づくや、林藏、これまでの記録一切を取りまとめ、從者に渡して言ふやう、「我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝、これを白主に持歸りて、必ず日本の役所に差出すべし」と。

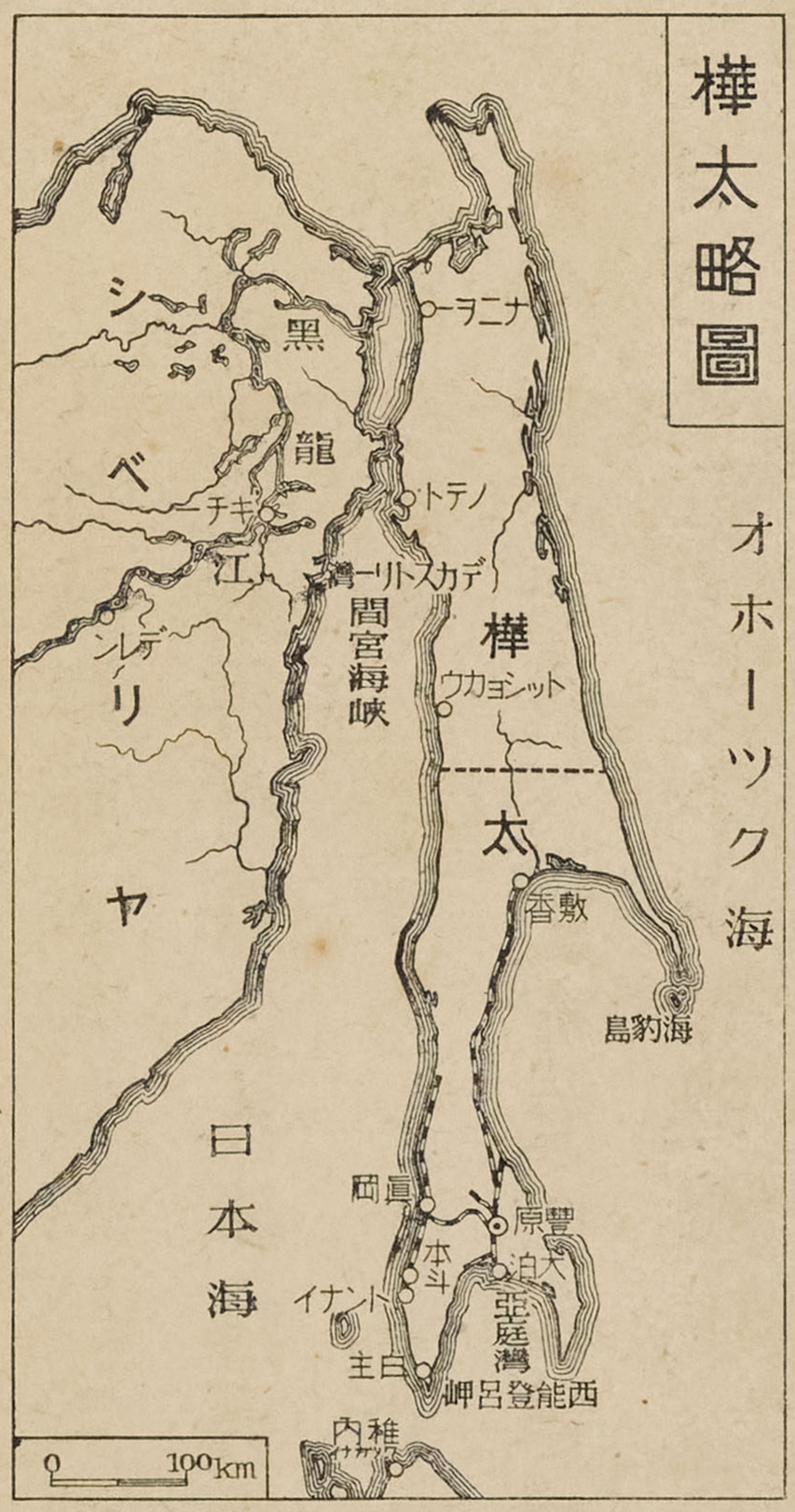
文化六年六月の末、コーニ・林藏等一行八人は、小舟に乘じて今の間宮海峽を横ぎり、デカストリー灣の北に上陸したり。それより山を越え、河を渡りて、黑龍江（こくりゆうかう）岸のキチーに出づ。其の間、山にさしかゝれば舟を引きてこれを越え、河・湖に出づれば舟を浮かべて進む。夜は野宿することも少からず。

木の枝を切りて地上に立て、木の皮にておほひ、八人一所にうづくまりて雨露をしのぐのみ。

キチーにて土人の家に宿る。土人等、林藏を珍しがりて他の家に伴なひ、多數にて取圍みつゝ、或は抱き或はふところを探る。やがて酒食を出したれど林藏、彼等の心をはかりかねてかへりみず。一老人怒りて林藏の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとも、林藏を救ひ出しぬ。

此の地を去りて、河をさかのぼること更に五日、遂に目的地なるデレンに達せり。こゝに支那官吏の

樺太略圖



そばるゝこと、キチーにかゝる中にありても、彼は其の地の事情を研究することを怠らざりき。

コーニ等の交易は七月にして終れり。

歸途、一行は黒龍江を下りて河口に至り、海を航してノテトに歸る。林藏はコーニ等に別れを告げて、同年九月白

出張所あり、各地の人々來りて貢（みつぎ）物（もの）を捧げ、かつ交易をなす。林藏の怪しみもてありしが、か

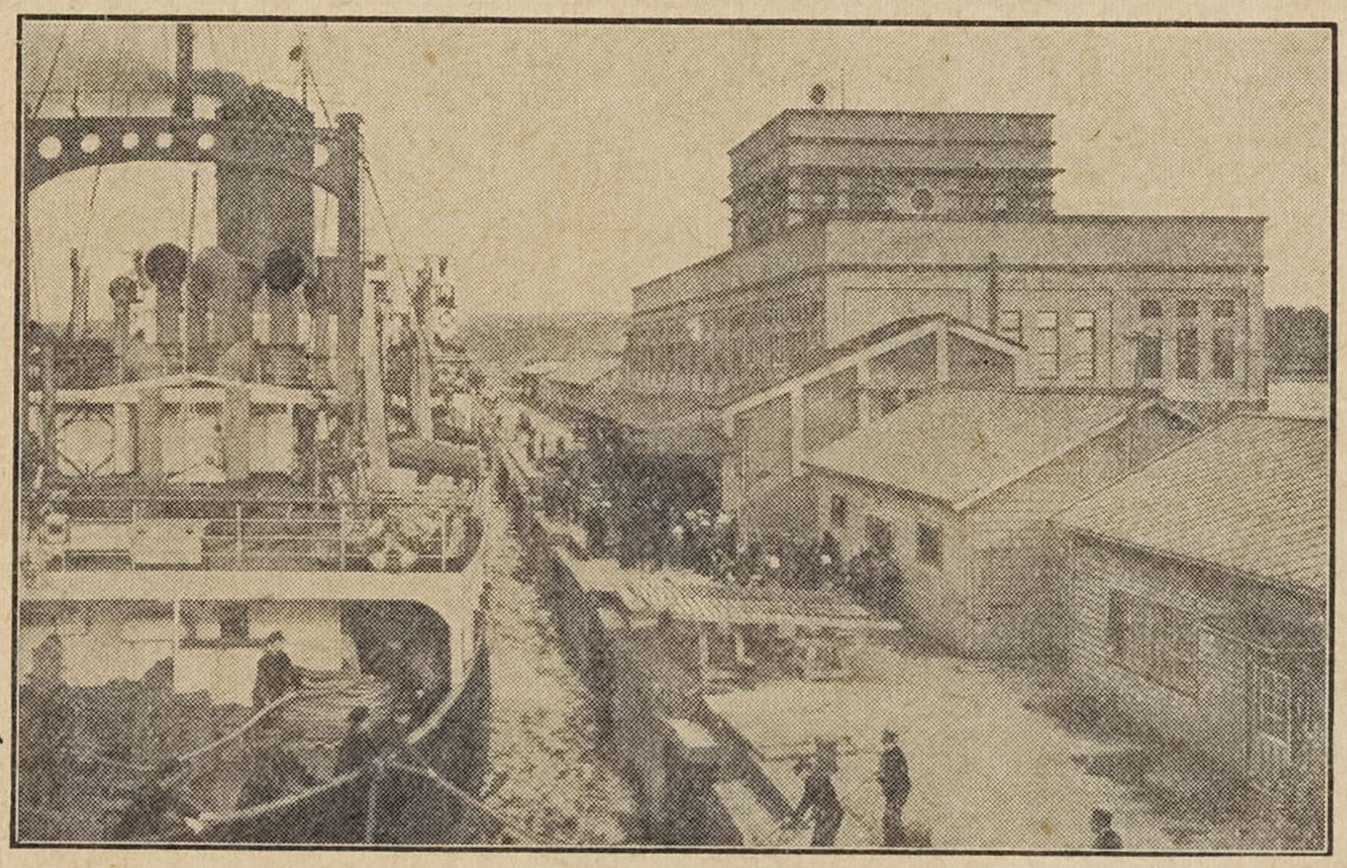
主に歸着しぬ。

林藏が二回の探檢によりて、樺太が島なること明らかになりしのみならず、其の對岸大陸の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

第十七　樺太（からふと）の旅

（一）大泊

連絡船が大泊に着いた時は、港内一面の濃霧で、甲板を過ぎる夕風が、ぞつとする程冷たく感ぜられた。七月の初といふことなど、つい忘れてしまひさうであつた。



樺太の玄關口といはれる大泊は、一面また西海岸の眞岡や本斗と共に漁業の中心地で、さすがに市内には活氣がある。四五月頃のにしんの盛な漁期には、沿岸を走る汽車の中まで、にしんの香で一ぱいだといふ。

公園神樂岡に上ると、先づ依仁親王武功記念碑が高く仰がれる。明治三十七八年戰役に、親王が軍艦千歲の副長として、敵艦ノーウイツクを擊沈せられたのは有名な話である。

此の附

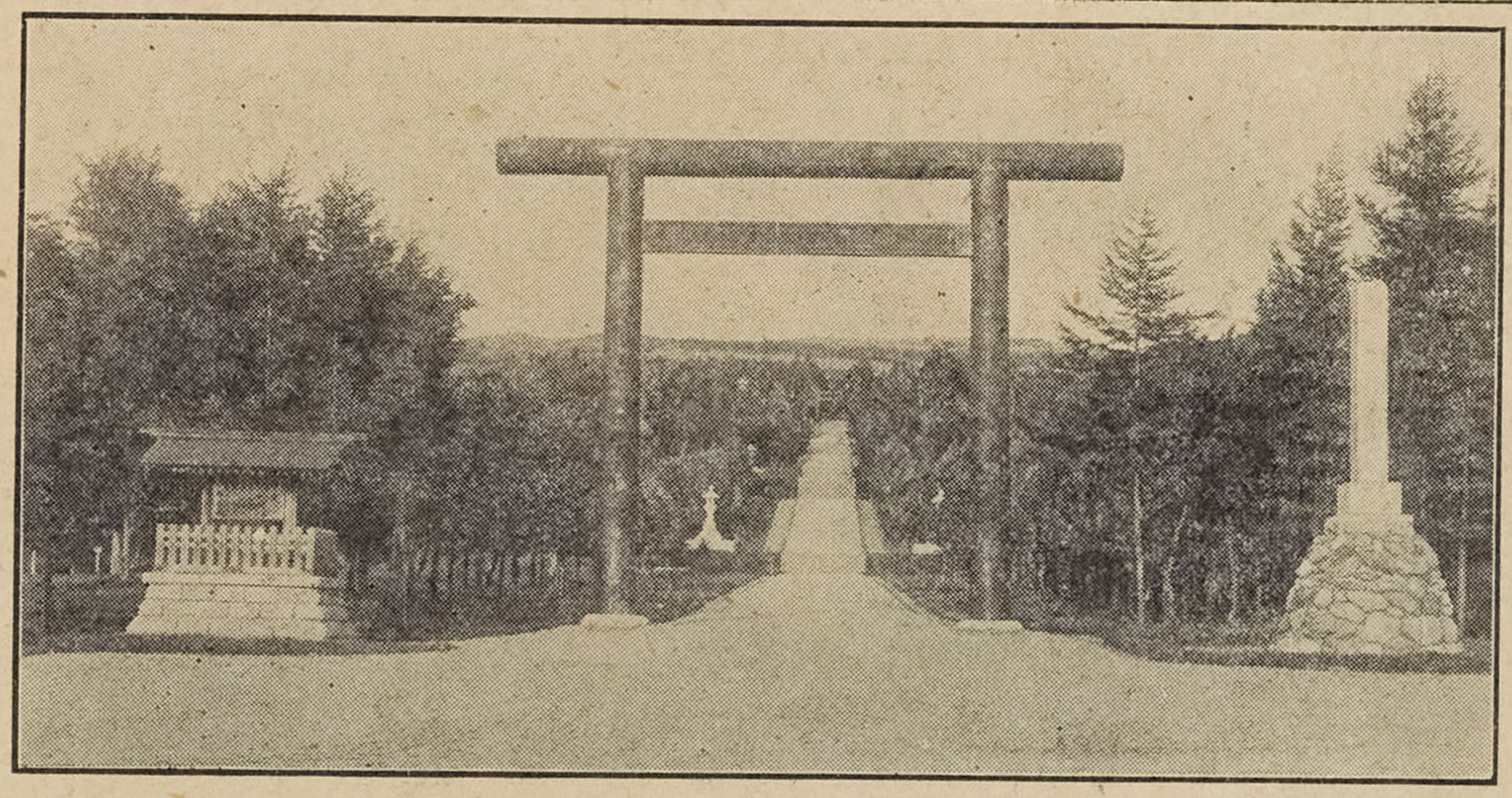
近から亞庭灣を見下したところは、何といふすばらしい景色であらう。棧橋にかゝる巨船は、油畫にでもありさうな圖だ。遠く眼を放てば、紺碧の色をたゝへた沖の潮にかもめが飛んで、其の果に能登呂岬の山々が紫に煙つてみる。

（二）豐原

樺太廳の所在地豐原市は、廣い耕地のある鈴谷平野の中央にあつて、本島第一の都市である。市街は井然として道幅が廣く、「しらかば」や「なゝかまど」の並木が美しく續いてゐる。

樺太神社に參拜する。一の鳥居、二の鳥居をくゞ

藥



つて、御影石の白い石段を登りつめると、市街は眼下に見下され、遠く樺太山脈の麓にかけて鈴谷平野が廣がつてゐる。

廣い境内に植込まれた木々は、内地で見られぬ新鮮な緑を着けて打ちそよいでゐる。

製紙

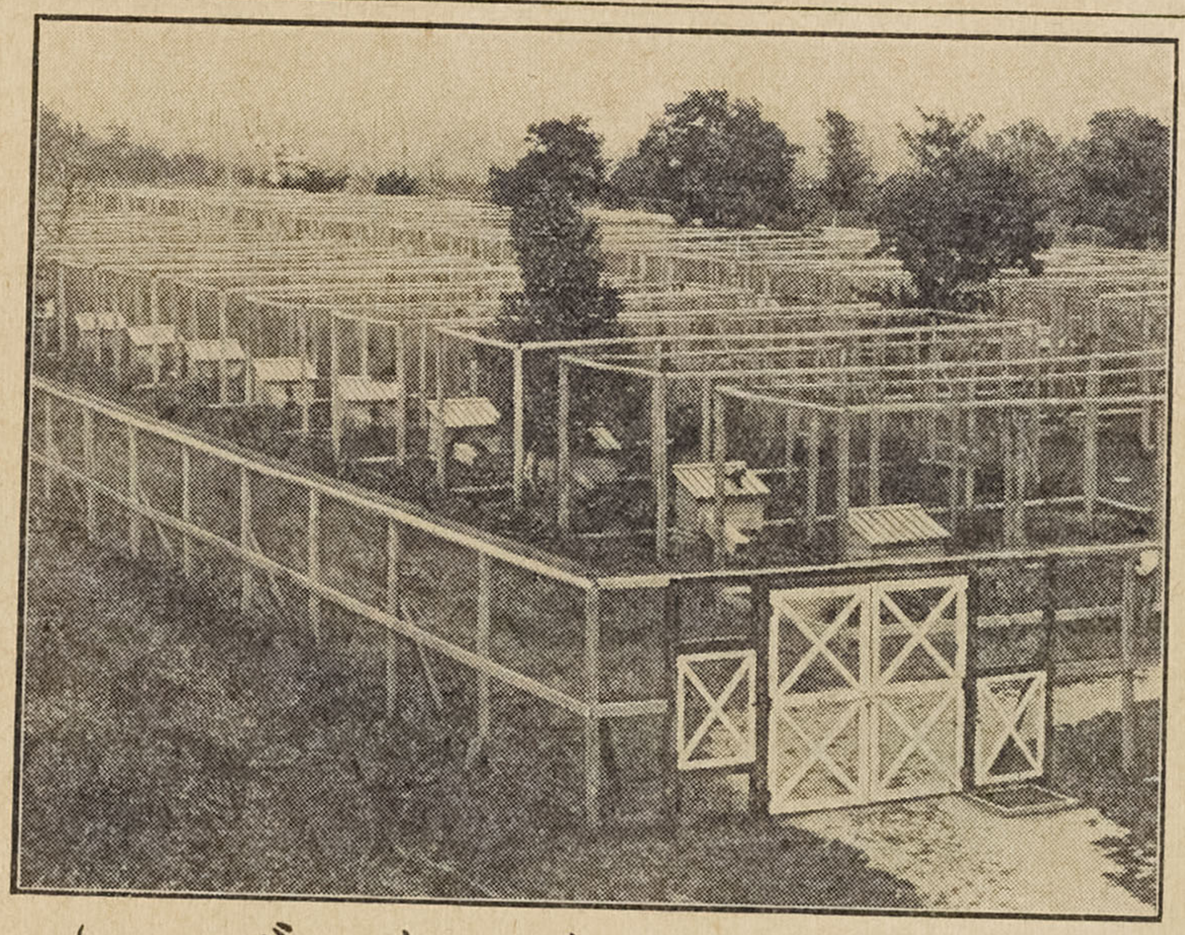
は、パルプ工場を見る。構内にどまつ」の丸太が山のやう。此の丸太を短く切り、細かく碎き、藥品でどろ〳〵になるまで煮、それを洗つて乾かし、パルプといふ厚紙に似た

ものに作るまでの工程が、すべて機械の働で順序よく行はれる。　かうして出来たパルプは、内地の製紙工場に送られ、もう一度どろ〳〵にとかされてから、種々の紙にすかれるのである。

工場を見た後、鈴谷川對岸の露人部落を訪れて、宿に歸つたのが午後の九時、まだ新聞が讀める程の明かるさだ。　樺太の夏の日の長さに、つく〴〵感心した。

（三）　養狐場

自動車で豐原市外小沼に向かふ。　燕麥の穂波を渡る夏風に吹かれながら、荒野の大道を走る愉快さ



は、ちよつと内地で味はへぬものの一つである。

中央試験場をたづねて、廣々とした農園や牧場を一巡する。珍しいのは養狐場であつた。金網で圍んだ中に、黒や黄色の狐が、きよとんとして、目を輝かしながら遊んでゐる。すばらしい毛並がよく、一匹千圓といふのがあるとのださうだ。

（四）　海豹島

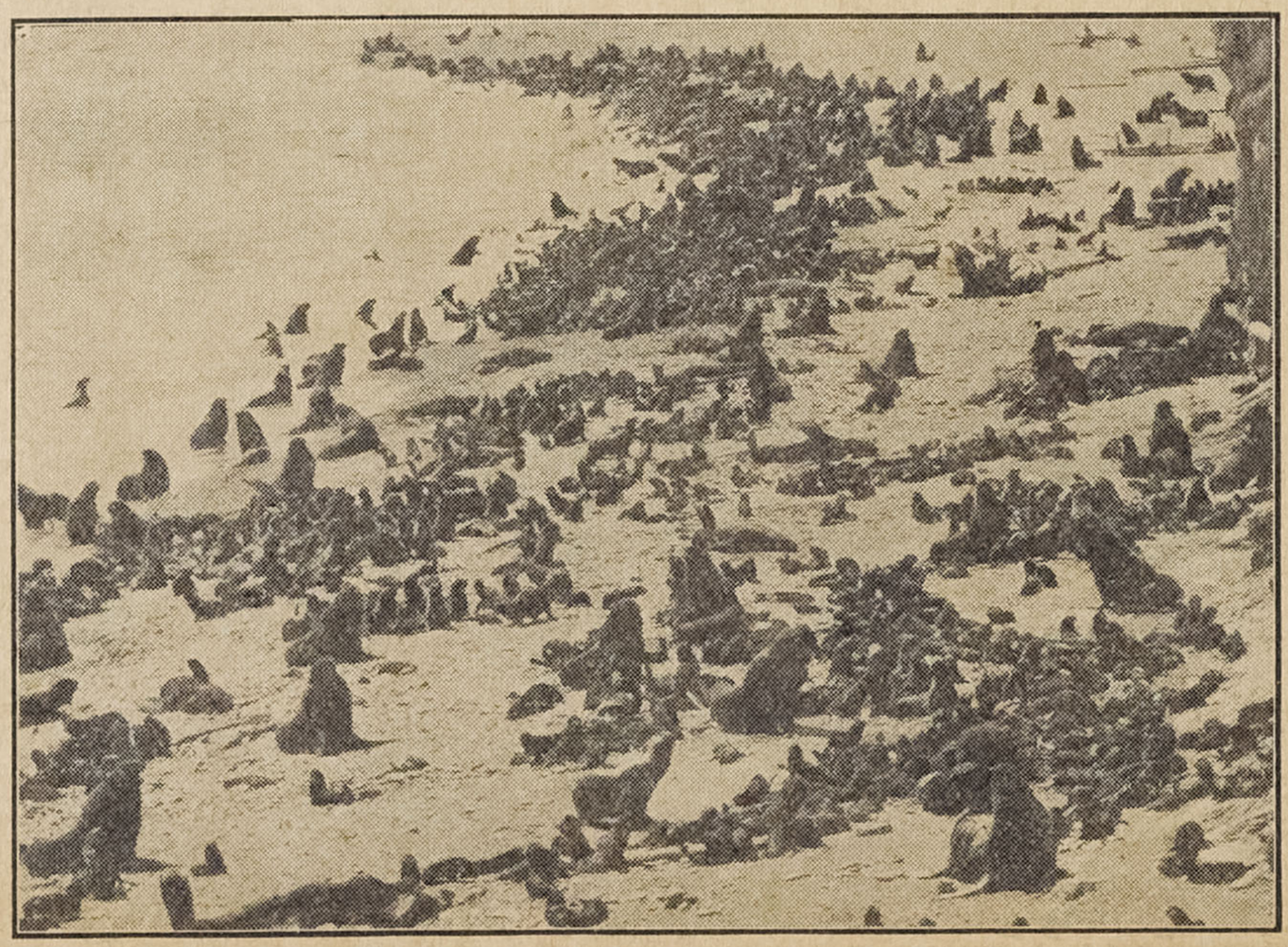
一帯が狐で立つてゐるのだ。尻尾だ。氣候が寒いので

居

オホーツク海の濃霧が薄れて、ぽつかり浮かび上つた不思議の島。　船は何時しか海豹島の西岸近く来てゐた。

「ギヤオ、ギヤオ」。「ウオー、ウオー」。——おつとせいの鳴く聲、ほえる聲。　さうして、ロツペン鳥の羽ばたき。

長さ七百米、幅七十米、海面上わづか十五米に過ぎない此の岩島に、三十萬のロツペン鳥と、三萬のおつとせいが群居してゐるのだから、其の騷



獣

ぎはたいしたものである。岩頭は、身動きもならぬ程た西岸から上陸すると、近寄つても、いつかな逃げようとしない。どれもこれも、水兵さんがエプロンを掛けたといふ、すこぶるこつけいな姿である。

東岸の砂濱は、無數のおつとせいだ。どつかとすわり込んで見張りをしてゐる牛のやうな巨獣たち、よち〳〵しながら砂濱に戯れる幼獣の群。ほえる

者、叫ぶ者、かみ合ふ者、ころがつて團扇（うちは）のやうな尾を振る者、それはそれは大變である。大てい五月末頃に上陸して、十月頃全部引上げるのださうだ。

急にものすごい羽音を立てて、ロッペン鳥が一氣に飛立つた。太陽をおほひかくすといふのは、此の事であらうと思はせる。

（五）國境

伐

幅約二十米、東西にわたつて一直線に伐開かれた林空。夏草の茂るに任せた、音一つしない國境線に立つと、何かしら一種のわびしさを感ずる。

ふと見ると、朽ちた木柵（もくさく）の中に、菊花の御紋章と大

標裏　ケン巻

日本帝國境界の文字とを刻した石標が立つてゐる。裏面には舊ロシヤの紋章とロシヤ文字が見られる。

原始林の彼方には、赤々と夕日が傾いてゐるのだ。

第十八　雲のさまぐ

澄んだ青空に、刷毛（はけ）で輕くはいたやうな、又は眞綿を薄く引きのばしたやうな白い雲の出るのを巻雲といひます。ごく細かい氷の粒の集つたもので、雲の中でも一番高く、八千米から一萬二千米の高さに浮かんでゐます。どこまでも細やかで、すつきりした感じの雲です。天女の輕い舞の袖を思はせるや

巻雲

うな雲です。

ところで、此の雲がだん〳〵ふえて廣がり出すと、すつきりした感じがなくなつて、形がぼやけて來ます。後にはごく薄い白絹（シラヤキ）か何かで空をおほつたやうになりますから、俗に薄雲といひます。太陽や月が、大きなかさを着るのは此の雲のか、つた時で、かさの中に星が見えれば天氣、さうでなければ雨だなどといひますが、果してどうでせうか。とにかく、そろ〳〵天氣がくづれるなと思はせるのが此の雲です。

鰯雲（巻積雲）

兆（チウ）龍（リユウ）

青空にうろこのやうに小さく群生（セイ）する白い雲は、さばの斑點（はんてん）に似てゐるところから、俗にさば雲といひ、又此の雲が出るといわしの大漁があるといふので、いわし雲ともいひますが、見た所は何だかさびしい感じの雲です。夜（ヨル）、此の雲の續く果に、半月の淡くかゝるなどは、殊にさうした感じを深くします。天候惡變の兆といはれる雲で、それが龍のやうに長く續く場合は、殆ど雨の近いこと受合だといひます。

羊

いわし雲より、ぐつと大きな塊になつて群生する白い雲があります。西洋人はよく牧場の群羊（ブンヤウ）にたとへるさうですが、日本では俗にむら雲などいつてゐます。青空に綿を大きくちぎつて、後から後から投出したやうで、中々景氣のよい雲です。

いわし雲がぐん〳〵ふえて來ると、空一帯が灰色（ハヒイロ）になつて、何だか頭をおさへつけられさうになります。太陽でも月でも、おぼろにしか見えませんから、俗におぼろ雲といひます。照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月とは、かういふ雲のかゝつた場合ですが、天候の前兆としては、いよ〳〵惡い方だと

3 雲

いひます。

いわし雲・むら雲・おぼろ雲は、何れも七千米以下三千米以上の所に浮かぶ雲です。

青空に薄黒い雲がみなぎることがあります。雨雲に似てゐますが、所々に青空が見え、雲の端々が白く見えて、其の間から日光がもれたりします。

きくかたまつたり、又時にそれが畠のうねのやうに、天の一方から他方へ幾條（デウ）か連なつたりすること

陰（イン）

とがあります。俗に曇り雲（グモ）とか、うね雲とかいはれる雲です。

雨雲はきまつた形がなく、空一ぱいに薄黒くおほふもので、亂雲（ランウン）と呼ばれてゐます。一番陰氣でいやな感じの雲であることはいふまでもありません。曇り雲と同じく、二千米以下にある雲です。

雨の降つたあげく、山の間などから流れるやうに滑り出る白い雲は層雲（ソウウン）といつて、雲の中でも一番低い雲です。高さは六百米ぐらゐです。

取れさうに見えますから、全く手に取れさうに見えます。

天氣のよい日、底が平で、上は山の峯のやうに積上

入道雲

つた形に現れる白い雲は積雲といひますが、夏の日など、峯が恐しい程むく〳〵とふくれ上つたのは、俗にいふ入道雲です。強烈な日光に照らされた入道雲が、まぶしい程、銀白色又は銀鼠色に輝くのを見ると、全く雲の王者（ジャ）といひたい感じがします。俳句で「雲の峯」といふのも此の入道雲です。

積雲は二千米内外の高さですが、入道雲の頂になると、六千米から八千米の高さに及びます。其の頂が朝顔形に開いたのは、かなと

こ雲といつて、雷雨を起したり、時にひようを降らせたりします。一天にはかに墨を流したやうに曇つて、天地も暗くなるのは、がうした、すばらしく厚い雲によつて日光がさへぎられるからです。巻雲のかぼそい女性的な美しさに比べると、積雲や、入道雲や、かなとこ雲は、如何にも壮大で、強烈で、男性的です。

第十九　燕岳（つばくろだけ）に登る

「出發。」

山田先生の聲が、中房（ナカブサ）温泉旅館の庭に勇ましく響き渡つた。

溪谷（ケイコク）　奔（ホン）　狹（セマ）

午前七時である。昨日（キノフ）の雨はからりと晴れて、太陽は朗かに此の溫泉溪谷を照らしてゐる。

リユックサック・水筒・金剛（こんがう）杖の身支度もかひ〴〵しく、僕等は、小鳥のやうにをどる胸を押さへながら、釣橋を渡つた。ごう〳〵と鳴る奔流の上に、高い橋がぐら〳〵動くのが、すてきに愉快だつた。

道は、すぐ登りになる。かちり、かちりと杖が岩に鳴つた。前の人の足跡を蹈みしめるやうに、一歩一歩登つて行く。狹い道の兩側には、大きな笹（さゝ）が僕等の頭をおほふくらゐ高く茂つてゐた。

岩角が出、木の根が横たはつてゐる。

「氣をつけろよ。」

と、前の方で聲がする。

た。　はづむ呼吸が、前にも後にもはつきり聞かれる。

かうして、つゞら折の明かるい山道をあへぎあへぎ登つた。　時々見下す谷底に、さつき出發した温泉宿が、だん〳〵小さくなつて行つた。　谷川が下で遠く鳴つてゐる。　つい向かふに、ぐつと見上げる程聳え立つてゐるのが有明山である。

「今日は、あの山よりもつと高く登るのだぞ。」

と、吉川先生が言はれた。

まばらな闊葉樹林を通して、太陽がじり〳〵と照

りつける。帽子の下から湧出る汗が、顔を傳(ツタ)つて流れ落ちる。息が苦しい程はづむ。

「先生、休んで下さい。」

と、後の方で何時しか悲鳴(ヒメイ)を上げる。

「もう少しがんばれ。」

と、前の方でまぜかへす。

間もなく、ぴり〳〵と嬉しい呼子(ヨビコ)が鳴つた。みんなは待つてゐたやうに、そこらへ腰をおろす。水筒の水を飲むと、のどがごくんと鳴つた。梢では、うぐひすが鳴いてゐる。谷底から吹上げる風が、はだに快く感ずる。

そろ〳〵針葉樹が現れて来た。

やがて針葉樹の密林へはいると、急を覚える。時に「さうしかんば」のはだが、梢からもれる太陽の光に映じて、薄暗い中に銀色に光る。道は幾分なだらかになつたり、又ぐつと急になつたりする。昨日の雨でじめ〳〵して、うつかりすると足が滑る。木の根岩角を數へるやうに、蹈みしめ蹈みしめ登つた。

「あと四粁だ。」

と、先頭の誰かが叫ぶ。道標の數字が次第にへつて行くのが力と頼まれる。時々休んでは、又勇氣を振

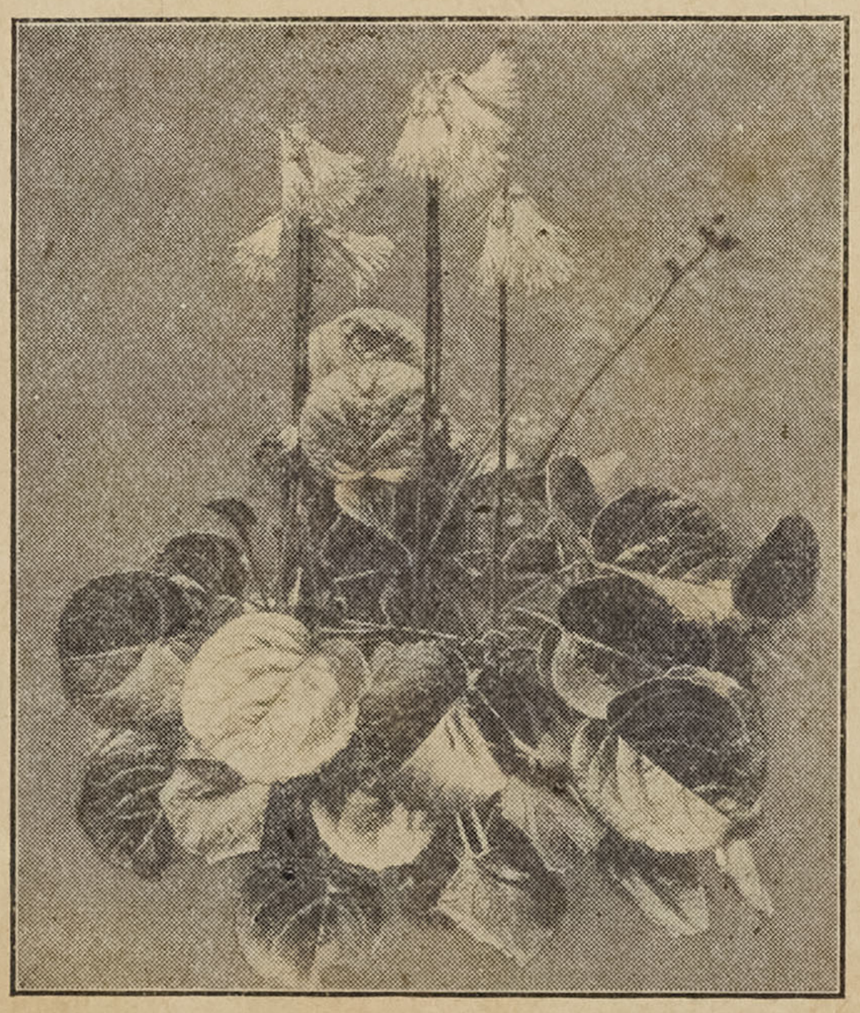
なゝかまど

いはかがみ

るひ起す。

植物に、變つたものがあるやうになつた。葉がふぢに似た「なゝかまど」や、大木から長くひげのやうにぶら下る「さるをがせ」などを吉川先生に教へてもらつた。かはいゝ桃色の「いはかゞみ」の花を道端に見つけるのが樂しみであつた。

あたりはだん〳〵霧が湧いて來て、大木の幹を彼方へ彼方



へと薄く見せた。耳を澄ますと、遠く近く、さまざまの小鳥のさへづりが聞かれる。

かうして、どう〳〵合戦小屋にたどり着いたのが午前十一時、みんなはずゐぶん疲れてゐた。こゝで辨當をたべる、そのおいしいこと。

空が次第に曇つて来た。霧もだん〳〵深くなる。しかし、小屋の人は、

「天氣は大丈夫です。」

と先生たちに言つてゐた。

それからも、しばらく道が急だつた。

霧の間に「さうしかんば」の林が續く。道端には、笹

が珍しく花をつけてゐた。

何時の間にか大木が少くなつて、丈の低い細い木が目につくやうになつた。遂にはそれもなくなつたと思ふと、眼界が急に開けて、山腹の斜面に、低い緑の「はひまつ」が波のやうに續いて見えた。

わい〳〵歡聲をあげた。

道は、やゝなだらかになつた。

「三角點。」

といふ聲がする。僕等は胸がをどつた。

やゝ廣く平な所に三角點を示す石があつた。

ばに腰掛が幾臺かある。中房溫泉から四・六粁と記

溫

した道標が立つてゐる。絶頂まであと二粁だ。

晴れてゐれば、こゝから、今登らうとする燕の絶頂も、槍岳（やりがだけ）其の他の山々も見えるさうだが、今日は何も見えない。行手の道も「はひまつ」も、すべて夢のやうに霧の中に薄れてゐる。たゞ天地がすてきに明かるかつた。

それから先は、尾根傳ひに、なだらかな道が續いた。薄日（ウスビ）がぽか〳〵と背中を溫（アタタ）める。道端は、「いはかゞみ」の花盛りであつた。小さいすみれや蘭（らん）も、所々に咲いてゐる。どれもこれも、すき通る程鮮かな色であつた。

ふと「はひまつ」の間に、高さ一米にも足らぬ「たかねざくら」が、今を盛りと咲いてゐるのを見た。眞夏に櫻の滿開であ

る。

「山は今春なのだ。」

と、吉川先生が言はれた。蜜蜂（みつばち）が盛に花から花へ飛んでゐた。

右手に見下す斜面に咲續く黄色い花は、大きいのが「しなのきんばい」、小さいのが「みやまきんぽうげ」

であつた。　其の間々に、白い「はくさんいちげ」や、深紅の「べにばないちご」などが點々と入亂れてゐた。花畠は、まるで滿天の星のやうに美しかつた。

其の邊から、所々に殘雪があつた。

遂に霧の中に近く山小屋を見上げる所へ來た。

下から風が強く吹き上げる。　足もとには、かなり大きな雪溪が見下された。

先頭は、もう山小屋の右下の鞍部（あんぶ）にたどり着いた。

「早く來い。　向かふは晴れて、山がすてきだぞ。」

と、誰かが帽子を振りながら、僕等に叫んでゐる。

紺紫

やがてそこへ登りついた僕等は、何といふすばらしい景色を西の方に見渡したことであらう。左端の穂高に續いて、槍岳が、それ〳〵天を突く槍の穂先のやうに突立つてゐる。更に右へ〳〵とのびる飛騨山脈が、三俣蓮華・鷲羽・水晶・野口五郎と、大波のやうに、紫紺のはだ鮮かに、屏風のやうに、そゝり立ち、うねり續く雄大莊嚴な姿。所々に白雲がたゞよつて、中腹をおほひ、峯を

刻

かくし、谷々の雪渓と相映じて、山々を奥深く見せる。僕等が今立つてゐる所と、向かふの山脈との間は、千尋の深い溪谷を刻んで、其の底に高瀬川の鳴つてゐるのが、かすかに聞えるやうな氣がする。此の大自然が展開する景觀に打たれて、僕等は殆ど一種の興奮を感ずる程であつた。

そこから右へ縦走して、燕の絶頂を目ざした。

馬の背のやうに、峯傳ひの道が續

界　塊

いてゐた。やゝともするとくづれようとする砂と岩との間を「はひまつ」にすがりながら進んだ。右下から吹上げる風は、もう〳〵と雲を巻上げて、それが此の尾根を界に消散する。それは不思議に思へる程はつきりとしてゐた。左は、急な斜面が神祕な谷底へ深く落込んでゐる。

とう〳〵燕の絶頂が來た。それは、大空の一角にそゝり立つ御影石の岩塊である。最頂は、十人とは乗れない程狹かつた。今こそ、二千七百六十三米の最高點に立つたのである。さつきの槍岳が「こゝまでお出で。」と言ふやうに、しかも甚だ嚴然と聳えてゐ

る。あの絶頂へ上る傾斜は、少くとも四十五度以上はあらう。

「あんな山へ登れる人があるのかなあ。」

と言ふと、元氣な山田先生は、

「もう二三年たつたら、君たちも槍へ登れるよ。」

と言はれた。

東も北も一帯に雲がとざして、僕等の村はもとより、富士・淺間・白馬・立山等の姿を見ないのが全く殘念であつた。

午後二時、下山の途についた。

「山は廣い。」と、僕はつく〴〵思つた。さうして何年

なかの後に、きつとあの槍に登らうといふ希望を抱き

ながら山を下つた。

第二十　蟲の聲

行水のすて所なし蟲の聲

名月や池をめぐりて夜もすがら

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

山路來て何やらゆかしすみれ草

鬼貫（おにつら）

芭蕉（ばせを）

蕪村（ぶそん）

春の海ひねもすのたりのたりかな
菜の花や月は東に日は西に
さみだれや大河を前に家二軒

第二十一　十和田紀行

夏の或朝、私は青森驛から十和田行の乗合自動車に乗つた。

郊外に出ると、自動車は八甲田山を目ざして進んだ。

展望が開ける。すばらしく男性的な八甲田の高原美が、私の心をとらへる。曲折した道は、かなり長く

續いた。　さうして、沿道所々に溫泉があつた。

ら十和田まで十二粁、名高い奥入瀬（おいらせ）の渓流に沿うて上るのである。午前八時、燒山（やけやま）に着く。こゝから

瀬（せ）の兩岸に絶壁がそばだち、樹木の密生する谷底の道を、流を右にし又左にしつゝ、進むのだ。　まるで渓流其のものを上つて行くといつた感じである。

流れはあくまでも澄み、水量は極めて豐かだ。

「如何なる大雨にも、此の渓流の濁つたことはない

と申します。」

と言ふ。　それが嬉しい。　溪流には、至る所瀬があり淵があり、瀧があり、岩の島がある。　車掌は更に、

「こゝは俗に九十九島と申します。　年中水位に變化がありませんから、どの島も水際から、こけがむし、草木が茂つてゐます。」

と言つて喜ばせる。　太古其のまゝの原始林には、所所天壽を全うした大樹が、立つたまゝ枯れてゐるのがあり、倒れて溪流に横たはつてゐるのがある。　時にぶなの密林が、梢の間から青空をのぞかせたり、茂みをもれる太陽の光が、下草のしだの緑を鮮かに浮

立たせたりした。

進んでいよ〳〵佳境は盡きない。絶壁に瀧を見、又右岸にそれを望む。見事なものばかりである。乘客の一人が、

「なる程瀧見街道だ。」

と言つたので、皆がうなづくやうにつこりする。

體は車に任せながら、心は瀧見に奪はれて少しもいとまがない。

子の口の大瀧を過ぎると、やがて眼界が開けて、前方に十和田の水面が現れた。まだ九時である。始めて下り立つた朝の湖は、殆ど口をきく氣もしない

程、靜かで神々しい。

遊覽船が出るといふので、すぐ乘込んだ。

船は御倉半島を目ざして進む。見ると、水の色はどこまでも藍だ、透明だ。清澄な水を六十平方粁の面積にたゝへて、十和田湖は、あふれるやうに廣がつてゐる。

御倉半島には水際から樹木が繁茂し、全山の木すべて自然の姿である。何といふ美しさであらう。此の岩山に、よくもこれだけの木が生茂つたものだと思はせる。

しかし、半島を廻つて中湖に入ると、風光が一變し

中湖を出て私はほつた。高さ二百米に及ぶ大岩石を休屋（やすみや）に至る間は、島あり、岬あり、入江もあつて、釣す

の絶壁が、水際から突立つてゐる。金屏風（きんびやうぶ）・五色岩など、多彩な火口壁があらはにも仰がれる。水深は四百米、水色も從つて深い。紅色の壁面が湖水の藍に映じて、さゞ波が紫に見える。すごい程美しい神秘の淵、とても物を投入れる氣になれない。半島の西湖岸

るによく、遊ぶによい。十和田湖の愛すべく親しむべき風光を、こゝに見出したやうに私は感じた。

第二十二　歐洲（おうしう）航路

日本を出發してちやうど一箇月、私は今地中海を航して、刻一刻イタリヤに近づいてゐます。今夜、半島南方の海峽を通れば、明日正午はいよ〳〵ナポリです。

考へてみると此の長い航海の印象は、まるで走馬燈の畫のやうに、それからそれへと廻り移つて、殆ど果しがないやうに感ぜられます。

神戸（かうべ）の埠頭（ふとう）で見送つて下さつた皆さんの顔や、帽子・ハンケチの熱誠こめた動き、それは今でも目の前に浮かんで見えます。　私は、あの時次第に遠ざかつて行く皆さんの姿が、どもすると涙でぼつとするのを感じました。　あれは七月二日の午後三時でしたね。

見渡す限り濁つた水が、殆ど天まで續いてゐるのを船窓から見ました。それが揚子江（やうすかう）だつたのです。　時折ジヤンクが近づいては、私たちの船

倉

に向かつて大聲に呼びかけます。支那だなと思はせました。

吳淞を右に見て、黄浦江をさかのぼるとやがて上海が朝もやの中に展開しました。岸に續く倉庫・洋館の列、江上にもやひする大小無數の船、其の船の間を縫ふやうに、私たちを乘せたランチが進んで、さて埠頭に下りると、そこはけたゝましい支那人の叫びで一ぱいです。何といふ騒がしい町だらうと、殆ど耳をお

拭

ほひたくなる程でした。

租界内には、多數の日本人を始め各國人が生活してゐます。繁華な町々を見物しながら、新公園に來て見ると、日本の子供たちが、池のほとりで仲よく遊んでゐました。

上海を出て三日目の午後、始めて洋上のスコールにあひました。空も海も急に眞暗になつたと思ふと、忽ち恐しい程の大雨です。其のすさまじさに、誰も一時ばう然としましたが、やがて拭つたやうに晴上つた海上の一角に、鮮かな島影を見ました。それが香港でした。

た。

對岸の大陸は九龍の市街で、それが手に取るやうに見えました。

南支那海にさしかゝると、海は急に朗かな、しかも香港は、美しい建物を以て麓から中腹まで、ぎつしりと埋められた島山でした。夜になると幾十萬の電燈が輝いて、此の島を寶石でも飾つたやうに見せました。

畫は街上に熱帶植物の緑がしたゝり、植物園には蘭科のあらゆる種類が、かをり高く咲いてゐました。

慰

濃い青さを見せました。　右の地平線上、はるかに安南の山が半日以上も續いて見えたのも、私たちには大きな慰でした。

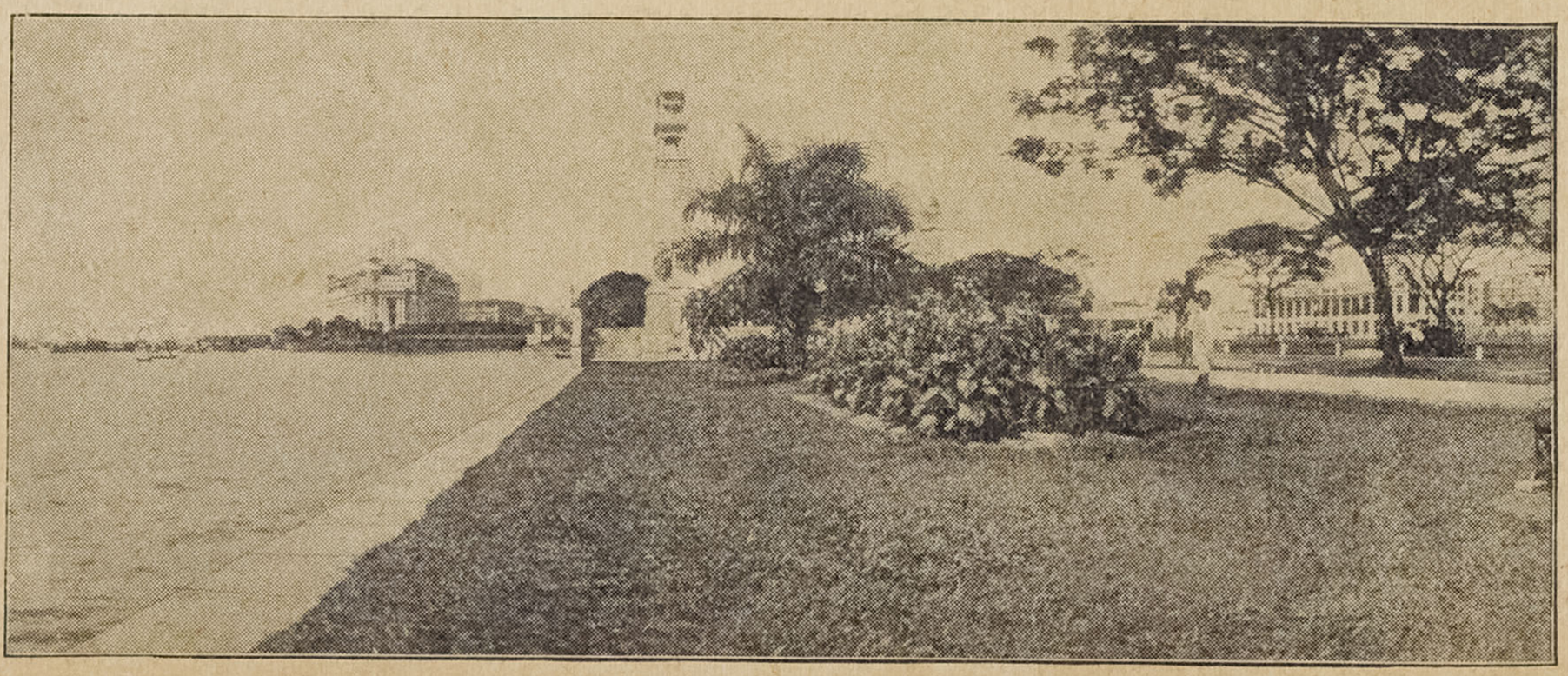
七月十三日の午後、シンガポールに着きました。夕やみ迫る廣い海岸通を散歩すると、あいにく風は絶えて、椰子の梢には、そよとの葉ずれの音もありません。　さすがに暑いと思ひました。　時々が近寄つて來て、自動車に乘れとすゝめます。　どれもこれも、色の眞黒な男ですが、意外にやさしい聲でした。　とある店に立寄ると、主人らしいインド人が出て來て、片言の英語で盛にあいきやうを振りまき

ます。　さうして最後に、

「あなたは日本人、私はインド人。日本とインドと仲よくせねばならぬ。」

と言つて、其の黒い大きな手で、私たちに堅い握手をしました。

かうして熱帯の港々をたづねながら進んで、七月十五日、船がスマトラ島の北端をかはすと、前は音に聞くインド洋です。　折からのモンスーンに、船は次第に動揺し始めまし



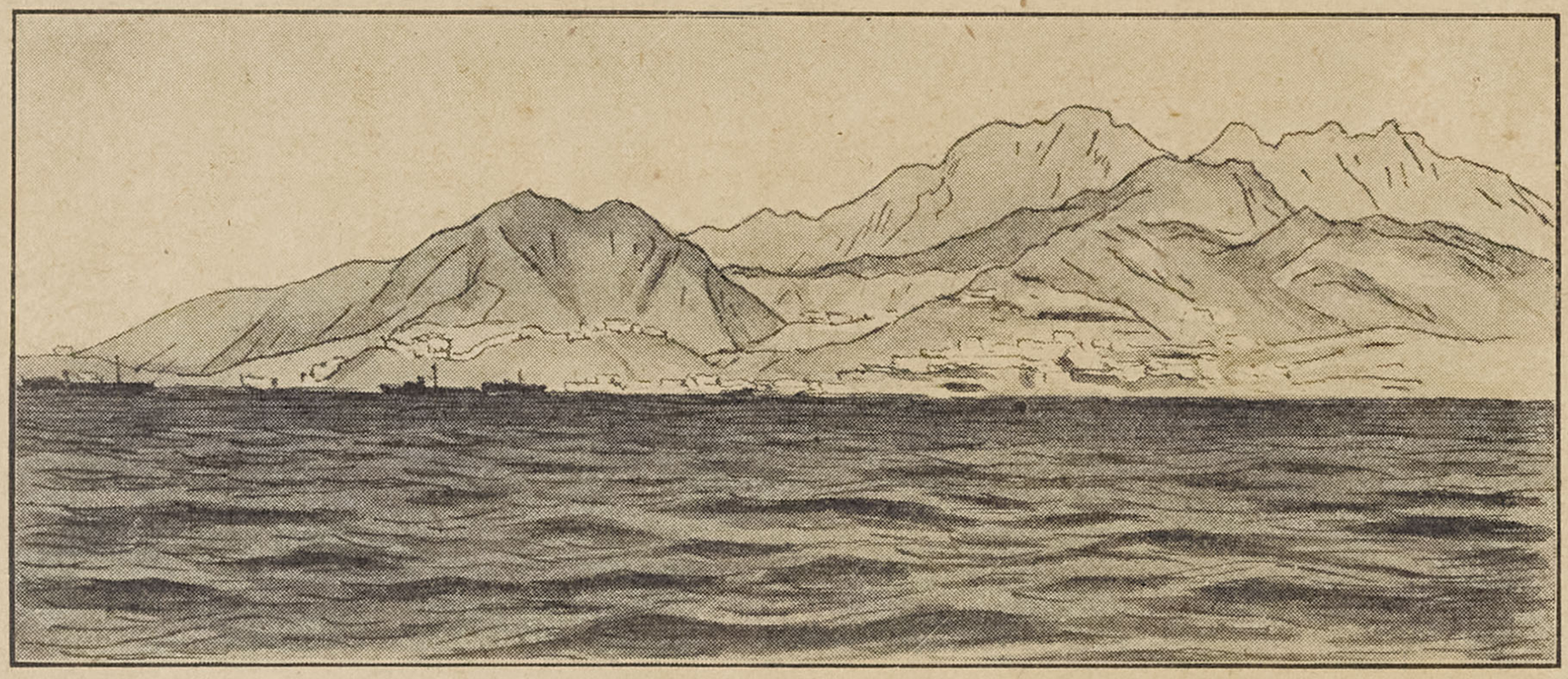
た。

無邊際の彼方から山のやうにうねる大波が寄せて、一萬二千トンの巨船の甲板に、瀧のやうなしぶきを浴びせました。しかし、幸ひ船に強い私は、毎日か、さず食堂へ出る程元氣でした。

波に明け波に暮れる日が、それから十日間も續いたのですが、途中一度、セイロン島のコロンボに寄港しました。十九日の朝です。先づ壯大な防波堤に打寄せる數丈の怒濤に、誰もが驚の目をみはりました。

直ちに自動車をやとひ、百十五粁の道を飛ばして、カンディーの古都をたづねました。それは山間の湖水にのぞむ靜かな市街で、ちやうど日本の奈良

海原滑



を思はせるものがありました。

アラビヤ海を航して亞丁灣に入ると、海は全く一變しました。灣へ、見た所はやはり果なき大海原ですが、水は油のやうに滑らかとはいしかも、それが寶石のやうな美しい青さをたゝへてゐました。アデン港に着いたのは、七月二十六日の夜明です。見渡す限りは、かみつくやうな岩山で、殆ど一木一草もない所に港があり、町があるのです。

烈々たる太陽の下に、アラビヤ人が駱駝を追つてゐました。　さうして、私たちの船は、こゝでおびたゞしい荷物を下しました。アラビヤの内地に輸送されるのだといふことを、まのあたりに見ることが出来ました。

其の日の夕方、涙の瀬戸にかゝりました。

ジヤ、左はアフリカ、此の二大陸が互に迫る中間は、五十粁とは離れてゐません。　海峡の眞中に、ペリムといふ小さい島があります。　兩方の岬も中の小島も、すべて岩ばかりですが、此の小さい岩の島が英領なのです。　考へて見れば香港以來、シンガポールも、コ

池

口　都　こ　ンボも、アデンも、皆英國人の經營の下に發達した
な　く　に貯水池や信號所を設けてゐるのです。
後　く　紅海は、名に似合はぬ眞青な海でした。其の眞青
廻　者　飛出しては、半圓をゑがいて水にをどり込みます。
　　つてゐるやうな感じです。
　　のですから、見てゐると、半分水上に現れた水車が
　　でした。
　　地圖で見れば狹くて長い紅海も、船から見れば殆

ど陸地を見ぬ大洋同然です。　時々島がみえるくらゐのものでした。　しかも、航海中こゝが一番暑い所でした。　寒暖計は四十度を越えようとします。　船室の物が、さはつてみると皆熱氣を吐いてゐました。

長い紅海も盡きて、七月三十日の明方にスエズに入港しました。　船は、これから有名なスエズ運河を通るのですが、私たちはスエズから約百三十粁、自動車で沙漠を走つてカイロの都をたづねました。

沙漠の朝風は、快なき程冷えてゐました。　行手は果が昇るに從つて、沙漠は熱を吐出しました。　顏や手

足がほてる、後には痛いやうにさへ感じました。　時折、向かふに湖水のやうなものが見えます。　沙漠の湖とは妙だと思ひながら、やうやく暑さに苦しむ身には、水景がなつかしくてたまりません。　しかし、行つても行つても、湖水はありません。　蜃氣樓の類でした。

それは、みんな蜃氣樓の類でした。

ナイル川に沿ふカイロの都に来て、始めて緑の椰子の木陰を見ました。

五千年の昔、此の川に沿うてエジプト王國が開け

ました。其の古い文明の跡をたづねるのが、こゝへ来る旅人の目的なのです。

いう〳〵と流れるナイルの水の上には、三角帆の船が浮かんでゐました。長い橋を渡つて、アカシヤの並木の續く道を行くと、やがて又沙漠の一端に来ます。こゝで駱駝に乘つて、先づ見に行くのが金字塔です。

石で積上げた幾多の金字塔の中、一番大きいのは高さ百四十七米餘、石の數三百二十萬、底の積が五百二十六アールもあるといはれてゐます。金字塔は、皆エジプトの王様や王

子の墓だといふことです。

大イ間を、體は獅子をかたどつたどつしりと陳列されてゐますが、幾室かにずらりと並んだ人間

のこイラでした。何千年の昔の人が、ここにイラとなつて、今私たちの目の前にあるのです。其の魂を呼起して、古い歴史を聞いて見たいとは、誰でも思ふことです。

汽車でポートサイドに着くと、港に私たちの船が待つてゐました。スエズ運河の北の端にある此の港には、運河を開いたレセップスの銅像が臺座高く立つて、遠く東洋への道を指さしてゐます。私たちの船は、其の指さす方と反對のヨー

ロッパへ向かつて、七月三十一日の午前に出航しました。

地中海を航して、今日はすでに三日目、空も海も、つきりと朗かですが、しかし溫度も下つて、何だか世は秋になつたといふ氣がします。今ば、あの熱帶の港々の強烈な日光や、植物の緑が、なつかしいもののやうにさへ思はれます。

私の船の旅も、八月五日マルセーユに着くまで、あと三日しかありません。長いと思つた歐洲航路も、今日まで殆ど退屈するいとまもないうちに過ぎて、しきりになごりが惜しまれます。

途中から、ちよい葉書は出しておきましたが、船のなごりに、今日は此の一箇月の思出を書いてどうぞ、皆さん、お元氣に。見ました。上陸したら、又各地から便りをしませう。

第二十三　月光の曲

ドイツの有名な音樂家ベートーベンが、まだ若い時分のことであつた。月のさえた夜、友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすぼらしい家の前まで來ると、中からピヤノの音が聞える。「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聞き給へ。なかな

かうまいではないか。」

彼は、突然かう言つて足を止めた。

二人は戸外にたゝずんで、しばらく耳を澄ましてゐたが、やがてピヤノの音がはたと止んで、

「にいさん、まあ、何といふよい曲なんでせう。私には、もうとてもひけません。ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聞いてみたい。」

と、さも情なさそうに言つてゐるのは、若い女の聲である。

「そんなことを言つたつて仕方がないぢやないか。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」

尋國十一

と、兄の聲。

「はいつてみよう。」

ベートーベンは、急に戸をあけてはいつて行つた。

友人も續いてはいつた。

薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が、靴を縫つてゐる。其のそばにある舊式のピヤノによりかゝつてゐるのは、妹であらう。二人は、不意の來客にさも驚いたらしい樣子である。

「御免下さい。私は音樂家ですが、おもしろさについ釣込まれて參りました。」

尋國十一

と、ベートーベンが言つた。　妹の顏はさつと赤くなつた。　兄は、むつつりとしてやゝ當惑（たうわく）の樣子である。

ベートーベンも、我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口ごもりながら、

「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが——あなたは演奏會へ行つてみたいとかしたいふことでしたね。　まあ一曲ひかせて頂きませう」。

其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も、思はずにつこりした。

「有難うございます。　しかし、まことに粗末なピヤノで、それに樂譜（がくふ）もございませんが」。

盲

と、兄が言ふ。ベートーベンは、

「え、樂譜がない。」

と言ひさして、ふと見ると、かはいさうに妹は盲である。

「いや、これでたくさんです。」

と言ひながら、ベートーベンはピヤノの前に腰を掛けて、すぐにひき始めた。其の最初の一音が、すでに不思議に響いた。きやうだいの耳には不思議に響いた。ンの兩眼は異樣に輝いて、彼の身には、にかが乘移つたやう。

入つて、何をひいてゐるか、彼自らも覺えないやうで

ある。　きやうだいは、たゞうつとりとして感に打たれてゐる。　ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。

折から、燈火がぱつと明かるくなつたと思ふと、ゆらゆらと動いて消えてしまつた。

ベートーベンは、ひく手を止めた。　友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピヤノのひき手の顔を照らした。

し、ベートーベンはたゞだまつてうなだれてゐる。　しばらくして、兄は恐る〳〵近寄つて、

「一體あなたはどういふお方でございますか。」

「まあ待つて下さい。」ベートーベンは、かう言つて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」

きやうだいは思はず叫んだ。

ひき終ると、ベートーベンは、つと立上つた。三人は、どうかもう一曲。」と彼はしきりに頼んだ。ヤノの前に腰を下して来る。

「それでは、此の月の光を題に一曲。」

と言つて、彼はしばらく澄みきつた空を眺めてゐた

激

又急流の岩に激し、荒波の岸に碎けるやう、最後はが、やがて指がピヤノにふれたと思ふと、やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空に上る月がやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生（しばふ）をどるやうな調べに、たゞぼ

うつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

「さやうなら。」

ベートーベンは立つて出かけた。

「先生、又お出で下さいませうか。」

きやうだいは口を揃へて言つた。

「參りませう。」

ベートーベンは、ちよつとふりかへつて言つた。

彼は、急いで家に歸つた。さうして其の夜はまんじりともせず机に向かつて、かの曲を譜に書上げた。ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博

尋國十一

したのは此の曲である。

第二十四　月の世界

望遠鏡で見た月

學校の門を出てから、正雄君が僕に言つた。

「君、今夜うちへ來ないか。」

「どうして。」

「にいさんが天體望遠鏡を作つたんだ。」

「ほう。」

「月がすばらしいよ。よかつたら見に來給へ。」

夕方、まだ明かるい空に、半月が光り始めた。おか

測

あさんにさう言つて、夕飯がすむとすぐ出掛けた。

行つてみると、正雄君のうちではもう望遠鏡をする爲附けて、にいさんと正雄君が、代る〳〵觀測をしてゐる。長さ一米ばかりの望遠鏡が三脚の上にのつてゐる。

「りつぱな望遠鏡ですね。」

と、僕がにいさんに言ふと、正雄君は、

「これでにいさんのお手製なんだ。見給へ、筒はボール紙だらう。三脚はやつと昨日出來上つた。僕もずゐぶん手傳つたよ。」

「レンズは。」

「買つたのさ。レンズは大分上等なんだ。」

正雄君は、さも自分で買つたやうな口振をする。

いさんは、初からにこ〳〵しながらだまつてゐた。

「さあ、君ものぞいてごらん。」

と、正雄君に言はれて、僕は望遠鏡に目を近寄せた。

望遠鏡の圓い視野に、月がくつきりと浮出して見える。それは肉眼で見るのとすつかり感じが違つて、今に露でも滴りさうな、生々しい、鮮かな美しさである。

「きれいだなあ。」

僕が思はず叫ぶと、正雄君が、

「きれいだらう。」

と、あひづちを打つやうに言ふ。　だが、よく見ると、月の表面は決して滑らかではない。一面にざら〳〵したやうな感じである。　殊に、半月の近く、蜂（はち）の巣を思はせるやうなでこぼこが目立つて見える。

「でも、ずゐぶんあばたですね。」

と、僕が言つたので、にいさんも正雄君も、どつと笑つた。

それからも、三人代る〳〵のぞきながら、にいさんおもしろい説明を聞いた。

険

にいさんの説明

あのあばたのやうに見えるのは、大部分が火山で、穴は噴火口(ふんくわ)です。こんな小さい望遠鏡でさへ、はつきり見えるのですから、噴火口は非常に大きいものだといふことが考へられます。一番大きいのは、直徑が二百粁もあるといはれてゐます。かうした火山は、どれもこれもこれも險しくて、低いのでも三百米、高いのになると八千米――富士山の二倍

以上もあるのがあります。　もちろん、月は地球と違つて、かつ　どつくの昔、すつかり冷えてしまつた天體ですから、火山といつても、みんな死火山ですがね。それから、よく見なさい。　月の中に薄黒い、大きな斑點のやうなものがあるでせう。　あれは「海」といはれる部分ですが、月には水一滴ありませんから、海とも知れません。ふより平原といつた方がよいかもんな火山から噴出した熔岩が流れて固まつたものでせう。

従つて雲や、雨や、あらしや、さういつと言ひましたが、水ばかりか空氣

いのが　　のかや據こるはた我々地球上の氣象現象は一つもありません。月から、月の世界では、晝はこげつくやうな暑さ、夜は其の反對にひどい寒さであらうと思はれます。

まだおもしろいことがあります。かりに私たちが月の世界へ行つたとすると、其の景色はどんなものがないから、太陽に照らされた部分は目が痛い程光つてゐるやうに、光を調節するものがないから、太陽から來る光や熱を調節するものがないから

見えるでせうが、陰になる部分はきつとるに違ひない。ごつ〳〵した火山が至るそれが眞黒な大空に突立つとしたら、どんい景色でせう。もちろん、草も木もありやましいと思ふのは、月から見た其の代り一つうらな地球の美觀です。地球の直徑は月の約四倍ありますから、夜、月から地球を見るとすると、我々が常に見る月の四倍ぐらゐな地球が、天にかゝつて見えるわけです。

かういふ風に、月の世界は、いはば全く恐しい死の世界ですが、それでゝ、昔から月程やさし、平和な

氣持を與へてくれるものはありません。其の青白い、しみ〴〵と親しめる光が、我々に大きな慰を與へるからです。殊に日本では、昔から月と文學が、全く離れられないものになつてゐます。ごらんなさい、歌でも、俳句でも、詩でも、月に關するものがどんなに多いか。月の世界に都があつて、そこで天人が舞つてゐるなどは、實に美しい想像ですね。今日私たちは、それが死の世界であると知つても、やつぱり月がなかつたらさびしい。峯の月、大海原の月、椰子の木陰の月、さういふものがないとしたら、殆ど生きがひがないと思ふでせう。月は、永久に人間の心の友で

あり、慰であります。

第二十五　秋

ちんちろと
蟲の聲、
草むらに
日は落ちて。

ぎんぎらと
露の玉
月かげは

貴

ぬれにけり。

とろ〳〵と

もゆる火に、

栗はぜて、

其のにほひ。

第二十六　鐵眼の一切經

にして、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。しかも其の卷數幾千の多きに上り、これ

一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書

版渡存　巡資調

が出版は決して容易の業にあらず。されば古は、支那より渡來せるもののわづかに世に存するのみにて、學者其の得難きに苦しみたりき。

今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。一代の事業として一切經を出版せんことを思ひ立ち、如何なる困難をしのびても、ちかつて此の企を成し遂げんと、廣く各地を巡りて資金をつのること數年、やうやくにしてこれを調

ふることを得たり。　鐵眼大いに喜び、まさに出版に着手せんとす。　たま〳〵大阪に出水あり。　死傷すこぶる多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。　鐵眼、此の狀を目擊して悲しみにたへず。つら〳〵思ふに、「我が一切經の出版を思ひ立ちしは佛教を盛にせんがためなり。　佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんがためなり。　喜捨を受けたる此の金、これを一切經の事に費すも、うるたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。一切經を世に廣むるは、もとより必要のことなれども、人の死を救ふは更に必要なるにあらずや。」と。　す

効　　費

なはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金をことごとく救助の用に當てたりき。

苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も殘らずなりぬ。然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力することと更に數年、其の効果空しからずして、宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比にあらず。幕府は諸處に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、人々の苦しみは日び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中

尋國十一

止し、力の及ぶ限り広く人々を救ひぬ。

二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、遂に奮つて第三回の募集に着手せり。鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附する者意外に多く、此の度は製版・印刷（いんさつ）の業着々として進みたり。

かくて鐵眼が此の大事業を思ひ立ちしより十七年、すなはち天和（テンナ）元年に至りて、一切經六

千九百五十六巻の大出版は遂に完成せられたり。

これ世に鐵眼版と稱せらる、ものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりのことなりとす。　此の版木は今も萬福寺に保存せられ、三棟（むね）の倉庫に滿ち〳〵たり。

福田行誡（ぎやうかい）かつて鐵眼の事業を感歎していはく、「鐵眼は一生に三度一切經を出版せり。」と。

第二十七　空中戰

午前二時、明方の夢は爆音に破られた。すぐ飛行服に身を固め、軍刀を片手に、地圖其の他をたづさへ

て飛行場に出る。

空は一面の星だ。月はもう西の地平線近くかゝつてゐる。

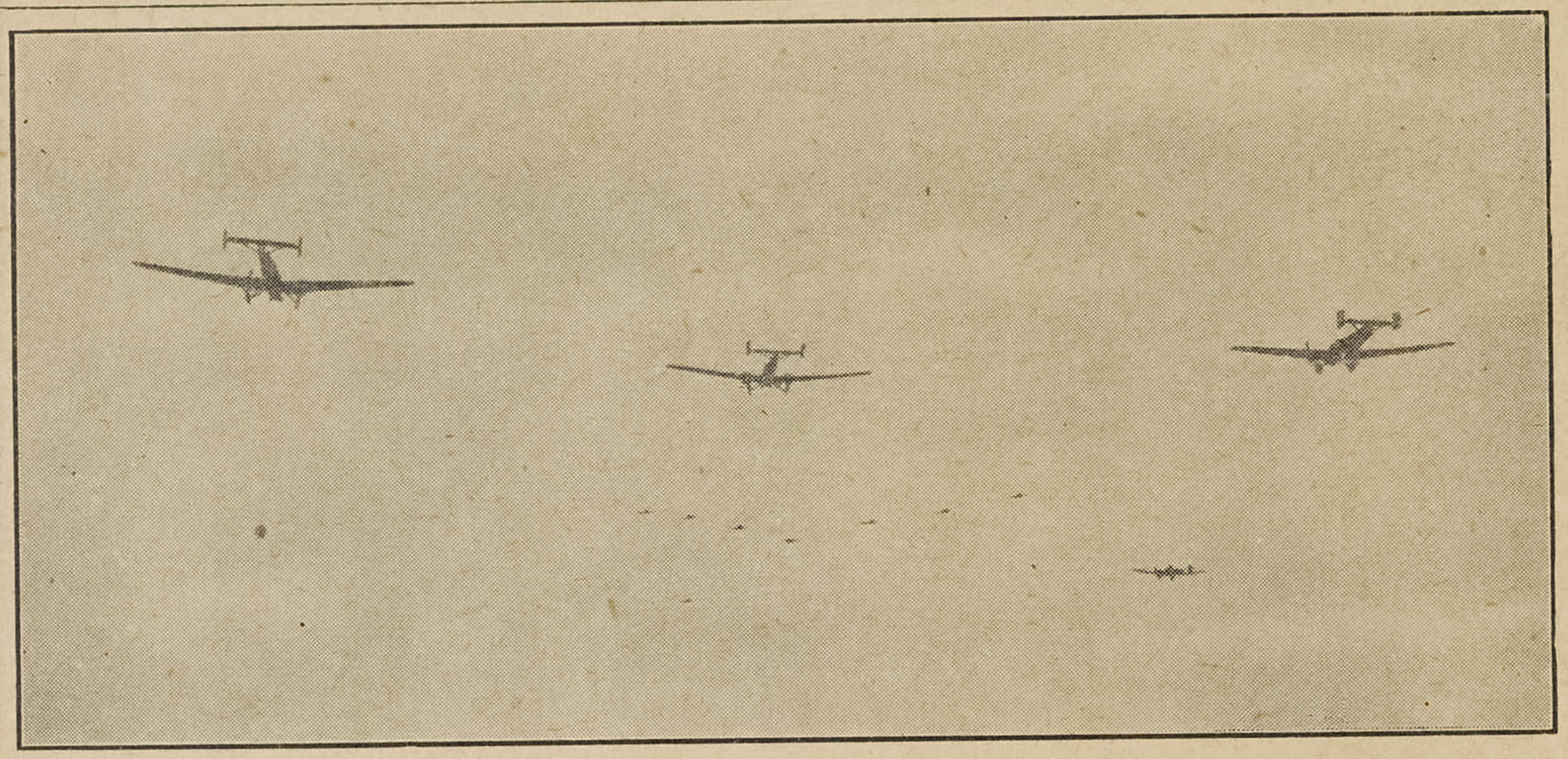
二十數機の爆音が高らかに響いて、廣を壓する。そゞろ、今日の敵飛行場爆撃の壯觀が思ひやられる。整備員たちの不眠の努力が、すべての飛行機の調子よい爆音に現れて、如何にもそれが快く聞かれるのだ。

全員整列して、部隊長の注意を聞く。嚴かな中に慈愛のこもつた言葉が、我々をいよ〳〵緊張させる。口にこそ出さぬが、心はたゞ一死報國があるばかり

である。

腹一ぱい爆彈をかゝへた愛機に身をゆだねると、やがて出發信號の下に滑り出す。時に午前二時三十五分。部隊長機を先頭に離陸して、ぐん〳〵上昇する。夜間ながら、見事な編隊群が忽ち の中に出來上つた。

千米から千五百、二千と高度がふえる。千と四千米の高度に達して、厚い飛の間にか落ちて、ぼんやり見える大地がだん〳〵遠ざかつて行く。遂に西十度の方向を目ざしながら、時速四百粁、ほの暗い空をたゞ



一直線に飛んでみるのだ。

出發して二時間は過ぎた。四千米の空には早くも夜が明けて、僚機(れうき)が、くつきりと深紅の太陽の光を浴びる。はるか向かふには、小型(こがた)戰鬪機の群が、我々爆撃部隊を掩護(えんご)しつゝ飛んでゐる。何といふ賴もしい姿だ。

下界がだん〳〵明かるくなつた。我々はもう地上部隊の戰線を遠く越えて、敵地のまつたゞ中

速

にはいり込んでゐるのだ。

突然通信手の顔が緊張した。我が快速偵察機からの通信を受けてゐるらしい。やがて、通信紙にしたゝめた報告文が機内に廻される。

「敵戰鬪機約二十機午前四時四十分離陸、北方に向かつて行動開始。飛行場東西兩側の格納庫附近においては、敵爆撃機離陸準備中なるものの如し。」

すると、部隊長機から追つかけるやうに、機上無線電話による命令が傳へられた。

「部隊は、速に敵飛行場を爆撃せんとす。爆撃目標、第一編隊群は東側、第二編隊群は西側の格納庫及

び飛行機。」

同時に、我が戰鬪機編隊群は矢のやうに前進し出した。と見れば、はるか彼方に、とびのやうな敵の數機、多分戰鬪機であらう。六機、八機、九機、刻々に其の數を增す。今更胸のをどるのを覺える。

敵の飛行場が遠く望まれる。

忽ち我が編隊群の下方に、上方に、こもぐ〳〵花火のやうな白煙が上る。敵が高射砲を打出したのだ。

戰鬪機は、何時の間にか編隊を解いて、自在の活動に移つた。各機それ〴〵敵機とからんでの空中戰だ。しかも、此の戰鬪のあひ間を巧みに抜けて、こし

尋國十一

やくにも我が爆撃編隊に突進する敵機がある。

突然、愛機がぐらつとゆれた。はつとして、思はず身が引きしまる。高射砲彈の炸裂（さくれつ）のあふりをくつたのだ。見ると、ごく間近に、白い煙が後へ流れてゐる。とたんに、今度は「ピュッ、ピュッ、ピュッ。」と耳もとをかすめる鋭い音。後、下方から迫る敵機の機關銃彈だ。生意氣なと思ふ間もあらせず、

「タ、タ、タ、タ、タ、タ、、、、、。」

我が後方機關銃が、ものすごく鳴つた。忽ち黑煙を吐くと見る間に、火に包まれた敵機が直下に落ちて行く。

「萬歲。」

思はず機上に歡聲が湧いて、しばし爆音を壓する。

かうした敵に直面しながら、我が爆撃編隊群は、一絲亂れぬ隊形を以て刻々目標に迫る。

飛行場は目前に來た。そこには、まだ飛上れないでもがいてゐる飛行機がある。其の周圍を、右往左往する人影がある。

命令が下つた。

「それつ。」とばかり、一彈、二彈、續いて第三、第四、、、、。

機の胴體から離れた爆彈は、絲を引くやうに目標めがけて落下する。

一瞬にして、飛行場にものすごい黒煙がうづ巻いた。　全彈命中。何といふ痛快さだ。

「天皇陛下萬歲。」

と、思はず誰かが叫ぶと、

「萬歲、萬歲。」

一同の聲が感激に震へた。

一騎討。　黒煙を上げて墜落する敵戰鬪機の活動は、なほ續いてゐる。　隼のやうに飛違ひ入亂れての一騎討。　黒煙を上げて墜落する敵機がある。　どうやら、其の悲鳴を聞くやうな氣がする。　敵を追つて地上へすれ〳〵に迫る勇敢な我が機がある。　はつとして思はず手に汗を握る。

尋國十一

黒煙晴れ行く眼下には、もう飛行機も格納庫もなかつた。たゞ其の殘骸が、眞黒に見えるだけだつた。

任務は終つた。今更のやうに、すばやい偵察機の報告や、勇敢な戰鬪機の掩護を感謝しながら、さうして、あわてふためいて打出す敵高射砲彈をしり目に掛けながら、機翼を連ねていう〳〵歸途についた。

第二十八　日本刀

刀は武士の魂である。古の武士は、寸時もこれを身邊からはなさなかつた。今の軍人も、軍刀には皆

これを用ひる。

日本刀の鋭利なことは改めていふまでもない。

源家の重寶鬚切（ひげきり）の太刀は、首を打つに鬚までも切れたので此の名があり、波おとぎ兼光（かねみつ）といふ刀は、切られた人が其のまゝしばらくおよいでから首が落ちたと傳へられる。其の外、胄（かぶと）を切つた話、鐵砲を切つた刀、馬の平首を手綱諸共に打落した話など、日本刀の鋭利を物語る傳説は數へるにいとまがない。

しかし、日本刀は、たゞ切味がよいばかりではなく、打合つて折れず曲らぬところに大なる優秀性がある。如何に鋭利な刀でも、斬合つて直ちに折れたり

尋國十一

殊鍛錬　値價

曲つたりするものは、實用にたへないから、古來刀工の苦心は此の上に注がれて、特殊の鍛錬法を發達させた。すなはち、日本刀は全體を同一の鐵で造るのではなく、切るに必要な堅さを持つ百錬鍛造の鐵と、折れないための柔かみを與へる鐵とを重ね合はせて造るのである。此の異なる二つの鐵の重ね方にはいろ〳〵あるが、柔かい鐵を刀の中心として、周圍を堅い鐵で包むのが最も普通である。

かうした實用上の價値の外に、美觀は、日本刀の持つ一大特色である。

長さ・幅・厚さの釣合の取れた形、氣持よくぐつとは

尋國十一

いつた反(そり)、物打から切先へかけての輕やかな線、それらをひつくるめた全體の美しさに先づ心は打たれるが、更に其のしつとりと滑らかで底光りする鐵の色、直刃(すぐは)・亂刃(みだれは)の刃文の美しさ等に至つては、筆舌のよくするところではない。世界何れの國に、かくの如き美しい刀劍があらうぞ。

しかも、日本刀の貴さは單に美のみではなくて、其のをかすべからざる氣品にある。鞘(さや)を拂つて、じつと眺めてゐると、どこから來るか、どこからか湧くか、一脈の氣魄(きはく)がりんとして身に迫るのを覺える。一度起つてこれを振るへば、惰氣(だき)も邪氣(じやき)も一瞬に霧散し

て、心氣は自ら清明となる。（セイメイ）しかも、此の氣品は決して荒々しいものではない。そこには、鐵壁をも貫ぬくべき鋭さを、かすみの如く包んだ一道の和氣がただよふ。此の氣品、此の氣魄こそ、日本刀の至寶であらねばならぬ。

刀工が刀を鍛へるに當つては、仕事場を清浄（しやうじやう）にし、身を祭り、精進潔齋（しやうじんけつさい）、ひたすら清らかな心を以て、一槌（ひとつち）々々精魂を打込むのである。若し邪惡な心があれば、如何に切味がよくとも捨ててかへりみられない。

日本刀の精神的意義は實にこゝにある。武士が

刀劒を帶する意義もこゝに存する。刀は、決して敵を斬るのを目的とするのではなく、身を守り、拔かざるにすでに敵を威服するに足るものでなければならぬ。

平和を愛し、美を喜ぶ我が國民の優美な性情と、善にくみし、邪をにくむ正義觀とは、まことに日本刀の精神其のものといふべきである。

句才鈍獲英險透資

跡禁麓錦

假漢撫拭

亂戲嫁誌

凡殆簡單

奮斜澄褐

伴吏藥穗

標兆陰溪奔

遺式盲激測

鎮護展飾華

例著麗莊縮

專曆接賞編

訪坐識努希

默岳永適龍

象倉慰昇

效保爆壓

鍛錬値善

恭層繁

慕祕朗

鬪距熟

狀留緣

係述鐘

紺佳

版貴視

終

昭和十三年二月五日印刷
昭和十三年二月七日發行
昭和十三年二月七日翻刻印刷
昭和十三年三月四日翻刻發行

著作權所有

著作兼發行者　文部省

小學國語讀本卷十一尋常科用

定價金拾六錢

昭和十三年二月八日
文部省檢查濟

發行所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
翻刻發行

兼印刷者　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
代表者　石川正作
翻刻發行

印刷所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

国立国語研究所
1002583472

0
4
472